

建築と社会

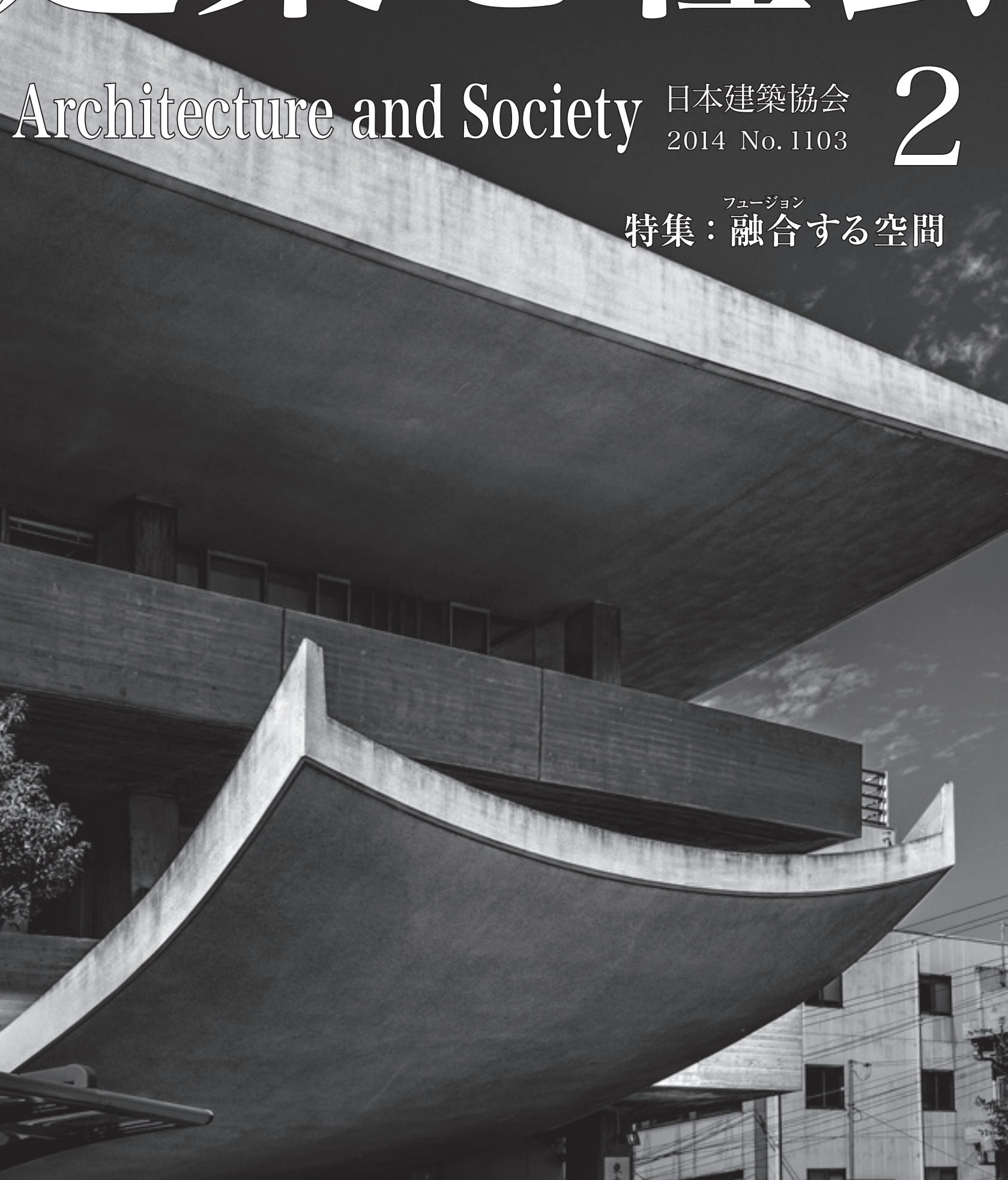
Architecture and Society

日本建築協会

2014 No. 1103

2

フュージョン
特集：融合する空間



チラシ封入サービスのご案内

会員限定

貴社の広告チラシを「建築と社会」発送と“同封”しませんか。
チラシをご提供下さい。

料金 1回につき

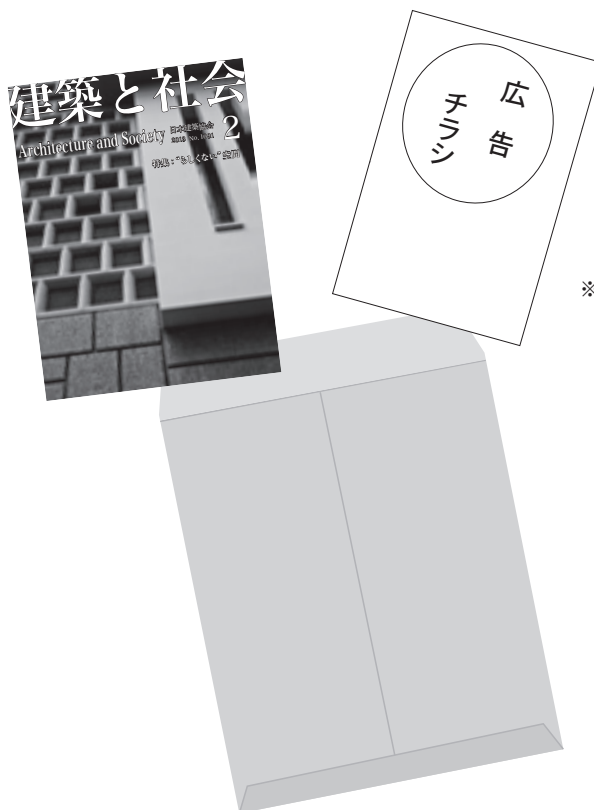
20,000円 (税別)

当協会でチラシをプリント（カラー片面）した場合20円／枚必要です。

申し込み方法：申込用紙にご記入いただきFAXまたはE-mailでお送り下さい。

お問合せは（一社）日本建築協会（担当／片山）まで

TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984 E-mail:h-katayama@aaaj.or.jp



※チラシサイズ：A4版
パンフレット：20頁程度迄

申込用紙 きりとり

会社名		
ご連絡先 (住所・担当者名・部署名)	住所 担当者名	部署名
ご連絡先 電話番号・E-mail	電話番号 E-mail：	

若き創造者たちへ

「第61回青年技術者顕彰」へのおさそい

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（平成26年3月28日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2. 原則として、すいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。

5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第61回青年技術者特集号」（平成26年7月号）に掲載する。

6. 提出資料

■すいせん用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めてA3判用紙5枚以内にまとめる。

① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7. 提出期限 平成26年3月28日（金）

8. 提出先 日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャングイズ・マートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

Email : h-katayama@aaj.or.jp

9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10. 青年技術者選考委員会（予定）

委員長 米井 寛／（株）東畑建築事務所取締役大阪事務所長

委員 吉岡 聡司／大阪大学大学院キャンパスデザイン室准教授

佐々木 栄／（株）昭和設計執行役員建築部門建築設計部統括

八木 康行／スタジオエイトアーキテクト代表

高梨雄二郎／（株）竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）

町澤真一郎／清水建設（株）関西事業本部設備設計部グループ長

山浦 晋弘／（株）安井建築設計事務所構造部長

辻 聖晃／京都大学大学院工学研究科建築学専攻准教授

高山 真／（株）日建設設備設計部門設備設計部長

山辻 直樹／大成建設（株）関西支店建築部購買管理室課長

阪井 聡／（株）大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長

第11回学生のための現場見学会 「NHK新京都放送 会館」

所在地
京都市中京区烏丸御池下虎屋町
574他
交通
京都市営地下鉄烏丸御池駅3-1番
出口



外観パース

今回の現場見学会は、テレビ・ラジオスタジオを持つNHK新京都放送会館です。災害時にも放送機能を維持することのできる防災性能を備えつつ、地域に開かれた京都らしい放送局舎を目指した建築です。現在躯体工事がほぼ完了し、内外装工事が進められています。遮音・防振等の音響性能が求められるスタジオをはじめとする特殊な内装工事の施工過程を体験することができます。

施工状況 内装工事
設計 (株)東畑建築事務所
施工 (株)大林組
日時 平成26年 3月6日(木)
14:00~16:30
定員 30名
集合場所 現場事務所
申込方法 ①見学会名簿
②学校名・学部・学科
③学生氏名・学年
④引率者氏名(おられない場合は不要)

⑤参加証送付先の住所
⑥TEL・FAX
⑦メールアドレス
①~⑦を記入の上、FAX
(06-6946-6984) かE-mail
(h-katayama@aaj.or.jp)
で。

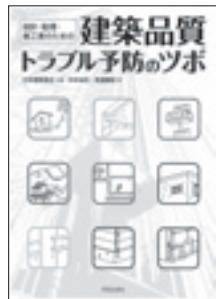
参加費 500円(保険、資料)
応募締切 平成26年2月20日
*定員になり次第締め切らせていただきます。

----- きりとり -----

名称	
学校名・学部・学科	
引率者職名・氏名	
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
参加証書送付先住所	
TEL	E-mail

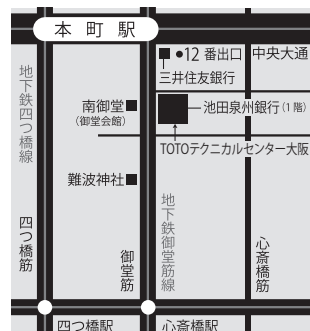
出版委員会企画 第37回<プロのノウハウ>講座 『設計・監理・施工者のための 建築品質トラブル予防 のツボ』出版記念講演

この講座は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。(2単位)
(公社)大阪府建築士会
(公社)日本建築家協会



企画 (一社)日本建築協会
著者 仲本尚志・馬渡勝昭
発行所 (株)学芸出版社
発行日 2013年12月25日
体裁 A5版・248頁
定価 2,800円+税

日時 2014年 3月18日(火)
18:00~20:00
会場 TOTOテクニカルセンター大阪
*大阪市中央区久太郎町3-6-8
御堂筋ダイワビル2階
※地下鉄 本町駅12番出口、
南へ徒歩4分。ビル北側の
エントランスよりエレベ
ーターでお越しください。
講師 仲本尚志・馬渡勝昭
定員 60名
受講料 会員1,000円、一般1,500円
学生1,000円
テキスト 『設計・監理・施工者のための
建築品質トラブル予防のツ
ボ』を使用します。当日、定価
2,940円(税込)を特価2,600
円(税込)でご提供します。



申込み 下記を記載の上メールかFAX
にてお申込みください。
①催し名、②氏名(ふりがな)
③所属、④会員・一般の別
⑤受講票郵送先住所、〒
⑥電話番号、⑦E-mailアドレス、
⑧CPDを申請される方は申
請先団体名と番号。

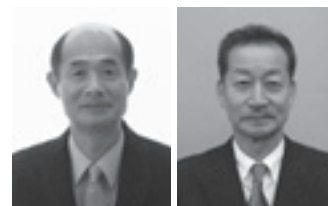
申込先 (一社)日本建築協会
TEL 06-6946-6981/FAX 06-6946-6984
E-mail: koukoku@aaj.or.jp (担当 藤巻)

講師がゼネコン設計部に在籍した経験
をもとに、設計者、監理者、施工者の
三者が共通して知っておかなければなら
ない建築工事の基本知識を作法とし
て、また、建築品質についてありがち
な問題を部位別に100テーマに厳選し
建築品質トラブルの予防と予知という
視点で解説をします。設計仕様を決め
る際、施工図をまとめる際、あるいは、
現場で施工する際、本書に示され
た100の「ツボ」はトラブル予防に良
く効くと思います。
設計、監理、施工に関わる若手技術
者にとって品質確保の良い教材とな
ります。是非ご参加ください。
(出版委員会委員長・清水建設株式会社
関西事業本部 建築技術部長 西 博康)

■著者プロフィール■

仲本尚志 (なかもと たかし)
1947年大分県生まれ。1970年大阪工業大
学工学部建築学科卒業。同年(株)竹中工務
店入社、設計業務に従事。2012年退職。
2000年3月、神戸大学大学院経営学研究
科修士課程科目履修・社会人MBAコー
ス。2007年3月、放送大学大学院文化科
学研究科修士課程修了。日本建築協会出
版委員。
著書『建築工事の祭式』(共著/学芸出
版社)

馬渡勝昭 (まわたり かつあき)
1947年宮崎県生まれ。1970年武蔵工業大
学建築学科卒業。同年(株)竹中工務店入
社、設計業務に従事。梅田スカイビル実
施設計等を担当。2011年退職。2012年1
月、一級建築士事務所 Atelier・YOU 設立。
2009年より、京都女子大学非常勤講師。
日本建築協会会員。



仲本尚志

馬渡勝昭

民間（旧四会）連合 協定工事請負契約 約款販売のお知らせ

このたび、一般社団法人日本建築協会中国支部でも、「民間（旧四会）連合協定工事請負契約約款」の販売を開始いたしました。
お近くのみなさまは、是非ご利用ください。

1. 販売価格
1 セット700円
2. 申込・問合せ先
一般社団法人日本建築協会
中国支部
〒730-0805
広島市中区十日市町1-1-9
相生通り鷹匠ビル4階
山陽工業㈱内

TEL : 082-232-6471
FAX : 082-291-2233
E-mail : info@aaj-chugoku.jp
*購入の依頼は、FAX、メール
でお願い致します。郵送にて
対応させていただきます。又
は、中国支部での直接購入も
可能です。

3. 送料実費

第13回 読者と選ぶ 「建築と社会」賞のための アンケート回答募集

2013年1～12月号
「建築と社会」誌から

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■選考対象

「建築と社会」2013年1～12月号に掲載された作品、及び個別の論文・記事を対象とする。

・「作品作風頁」欄、及び「本会支部作品頁及びそれに準ずる作品頁」掲載の建築作品

・「特集頁」掲載の個々の論文・記事
—特集頁全体は選考対象としない—

・「シリーズ頁」の論文・記事（gallery、法令コーナー、構造の頁、設備の頁、再読関西近代建築、関西の建築界／群像、新建材の頁、素材最前線、REPORT頁、Member's Forumほか）

■賞の部門

作品部門／1～4点

論文・記事の部門／1～4点

■会員読者による第一次選考

会員読者から投票された「作品」及び「論文・記事」に、編集委員会の意見を加味して各部門10点程度選出。これを第二次選考対象とする。

■選考委員会による第二次選考

第一次選考を通過した選考対象を、選考委員会で選出。（該当者に写真、図面、設計主旨などの説明資料を求めることがある）

■第11回選考委員（予定）

田中直人（島根大学総合工学部建築・生産設計工学科・特任教授／選考委員長）

高砂正弘（和歌山大学システム工学部システム学科・教授）

谷口与史也（大阪市立大学大学院工学研究科・教授）

■発表と表彰

作品部門は建築主、設計者、施工者の中の代表者に、論文・記事部門は執筆者（複数の場合は代表者）に、賞状（記念楯）を贈呈する。表彰式は6月中旬を予定。入賞発表は「建築と社会」2014年7 or 8月号予定。

■投票締め切り

2014年3月7日（金）

■送付先

（一社）日本建築協会
FAX 06-6946-6984
e-mail : kyoukai@aaj.or.jp
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階

*2013年の誌面詳細は、2013年12月号p53に掲載している総目録または日本建築協会HPをご覧ください。

なお、日本建築協会ホームページ<http://www.aaj.or.jp>からも、ご投票いただけます。

「建築と社会」賞 読者アンケート

送付先

(社)日本建築協会
FAX06-6946-6984
e-mail:kyoukai@
aaj.or.jp

「建築と社会」2013年1～12月号で、よいと思われた作品・論文・記事（特集の場合は個々の論文・記事を対象とする）、その他本誌に対するご意見を記入の上、e-mailまたはFAXで、（一社）日本建築協会へご投票下さい。

（2013年〇〇月号掲載の作品、論文・記事名及び同執筆者名を明記してください）

(1) お名前

(2) 勤務先または連絡先

(3) とくによいと思われた作品とその理由

(4) とくによいと思われた記事とその理由

(5) 本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたら、ご記入下さい。

あべのハルカス 見学会

この見学会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。

(公社)大阪府建築士会 (2単位)

(公社)日本建築家協会 (2単位)

●建築概要

所在地: 大阪市阿倍野区阿倍野
1-1-43

建築主: 近畿日本鉄道株式会社

設計: 株式会社竹中工務店

外観デザイン監修:

シーザー・ペリ (ペリー
クラークペリーアーキテ
クト)

施工: 竹中工務店、奥村組、大
林組、大日本土木、銭高
組共同企業体

敷地面積: 約28,700㎡

建築面積: 約25,000㎡

延べ面積: 約306,000㎡

タワー館部分: 約212,000㎡

階数: 地下5階、地上60階

高さ: 300m

構造規模: S造、一部SRC造

主用途: 百貨店・駅舎・オフィ
ス・ホテル・美術館

あべのハルカスは2014年春完成予定の高さ300mの日本一の超高層ビルである。計画地は大阪・阿倍野に位置し、近畿日本鉄道の大阪阿部野橋駅の直上に計画され、鉄道ターミナルビルとしては世界最大級の建築となる。この建築は鉄道駅に加え、百貨店、オフィス、ホテル、美術館、展望台など多様な機能が集積された、地上60階、地下5階、延床面積約30.6万㎡の超高層立体都市である。これら様々な用途は、超高層建築として、均質な架構の中にそれぞれの機能を押し込めるのではなく、異なるスペースが要求される各機能に沿って、架構が計画されているのが特徴となっている。

具体的には、百貨店は既存建物のスパンを延長した、正方形グリッドのスペースとし、新旧が一体となった平面を実現している。オフィスは光に溢れたセンターコアの南北に大スパンの執務空間を、ホテルは中央吹抜け周りに効率的に室を配した計画となっている。それぞれの機能が最適な状況で振る舞えるよう、架構がカスタマイズされた上で、それら個別の架構を繋ぎ合わせ、全体をネットワーク化させるように、立体的にトラスが駆け巡る。トラスは建物を

地震や風から守る構造体である一方、EVシャフトや階段スペースといった各機能を結ぶ動線として機能する他、エネルギーを供給する機械室、また、換気や採光を担う環境ヴォイドとして、建築を様々な角度からサポートしている。

ここでは、超高層建築を実現させるためのストラクチャーはその役割を拡大し、建物の都市的な活動を支援するインフラストラクチャーとして、まるで都市を設計するかのように計画されている。多様な活動がガラスのファサードを介して現れる姿は、建物の姿というより、都市風景の一部として、大阪・阿倍野の街に新たなダイナミズムを与える存在となっている。

(松田知也／竹中工務店)

日時 2014年 2月19日(水)

16:00~18:00(予定)

講師 松田知也氏(竹中工務店)

集合 現地

定員 30名／会員優先(個人会員
最優先)・先着順

参加費 会員1,500円、一般2,500円
学生1,000円

申込方法 FAXまたはEメールで、

①催し名「あべのハルカス」

②氏名

③会員・一般の種別

(会員は、個人・団体を明記)

④職場名または学校名

⑤参加証送付先

⑥連絡先電話番号

⑦CPDを申請される方は、
申請先の団体名とIDを明記

締切り 2月7日(金)

申込先 (一社)日本建築協会

TEL.06-6946-6981

FAX.06-6946-6984

E-mail: jigyoka@aaj.or.jp



【あべのハルカス】

建築と社会

Architecture and Society

2 | NO.1103 | 2014

日本建築協会

■特集予告

●3月号／東海支部特集

●4月号／第20回 会員作品 “私の空間作法”

今月の表紙

東大阪市役所旭町庁舎 (旧枚岡市庁舎)

設計：西澤文隆・東孝光
(坂倉準三建築研究所)

竣工：1964年

所在地：大阪府東大阪市



軒をめぐる帯とリズムカルな開口部が印象深い。軒下の処理、特に縦の線によって階毎に遠近景が操られる。外から見ると、屏風壁の薄さが見込深さが利く。離れば屏風は消え帯が強調され、近づけば見込が連なり、面となる。内から見ると、屏風壁と方立が利く。下階では周囲の雑物を切り足元の植栽へ誘う。上階は生駒山への抜けに満たされた頃、杣が陰となって踊る。丘の上に着地した造形に感じる和は、軒を通した風景との関わり方によるものかもしれない。

(東畑建築事務所／大西広朗)

撮影(表紙)

東出尚子(東出清彦写真事務所)

デザイン・撮影(目次)

嘉村知紀(東出清彦写真事務所)

J o u r n a l o f t h e A r c h i t e c t u r a l A s s o c i a t i o n o f J a p a n

特集●フュージョン 融合する空間

【総論】

フュージョンする空間～公共空間の多様化
～社交場としての能楽堂の再生～●服部滋樹 8

【各論】

- 1 風景というフュージョン 融合●花村周寛 12
 - 2 団地リノベーションスタンダードへの挑戦～MUJI×UR～
●長谷川晋一 16
 - 3 HOTEL ANTEROOM KYOTO／ANTEROOM APARTMENT
OSAKAアート&カルチャーを愉しむホテル&アパートメント
～集まって暮らすという愉しみ～●中原典人 18
 - 4 創造都市とワークプレイス～異分野・異文化の人たちが出会い
創発する場、Creative Lounge MOV～●齋藤敦子 20
 - 5 主観の行方～NEWLANDが出来るまで～●山本和豊 22
 - 6 インタビュー 中川政七商店●中川 淳 24
- 【編集後記】 28

会告 若き創造者たちへ「第61回青年技術者顕彰」へのおさそ
い。第11回学生のための見学会「NHK新京都放送会館」。
第37回プロのノウハウ講座『設計・監理・施工者のための
建築品質トラブル予防のツボ』。民間（旧四会）連合
協定工事請負契約約款販売のお知らせ。読者と選ぶ「建
築と社会」賞のためのアンケート回答募集。あべのハル
カス見学会。

gallery Factory→Office●濱田 猛 6

法令コーナー 天井脱落対策を推進●前田 亮 29

設備の頁 建築物の省エネ基準の改正●丹羽勝巳 30

再読 国鉄関西線奈良駅（現・JR旧奈良駅舎）●山形政昭 31
関西近代建築

関西の建築界 高砂正弘●吉永規夫 35
群像

Member's U-35委員会企画 1st action「建築と木材」活動報告 36
Forum 見学会&交流会

information 書籍紹介『重森三玲 モダン枯山水』。特別展 ター
ナー展 英国最高の風景画家。開館40周年記念名品展
上村松園、富本憲吉、田中一光… 美の世界～近現代美
術の100年～。第45回 日本美術展覧会 日展。アンドレ
アス・グルスキー展。「ひめじ官兵衛プロジェクト連携」
特別企画展 城 つわものどもが夢の跡。建築・建材展
2014（第20回）。ブルーノ・タウトの工芸ニッポンに
遺したデザイナー

新製品レビュー 付加価値商品によるハイクオリティな住空間のご提案 40
アーキテリASHATTER スカイフォールド
●スガツネ工業株式会社

月間の動き 平成25年12月 42



Factory→Office

建築家

濱田 猛 Takeshi Hamada

濱田 猛（はまだ たけし）

1975年 大阪府生れ
2003年 京都工芸繊維大学大学院修了
2003-05年 コンパス建築工房
2006年- 濱田設計測量事務所
2004年- 聖母女学院短期大学非常勤講師

一級建築士
設備設計一級建築士
一級建築施工管理技士
測量士

煉瓦造りの外観が印象的なこの建物は、かつて機械製作工場として使われていました。しかし、昨今のグローバル化による人件費の問題などから工場機能は外国へ移設され未使用のまま放置されていました。一方で国内にいる社員達はホワイトカラー化してオフィスが手狭になり、新たなオフィス面積の確保が重要な課題として挙げられていました。築100年を超える煉瓦+木造のハイブリッド建築物は、歴史的にも価値があり、企業のシンボルでもあります。また、経済的観点からも「建替え」という選択肢はリスクが大きいため、最終的に「既存ストックを活かしたコンバージョン」という手法を選択しました。アンティークの車や時計、家具には歴史という名の空気感が漂います。建物も同様で、その空気感を保持したまま設備や構造などの性能面を向上させ、安心で快適な空間に生まれ変わらせることができます。今回はさらに「工場」機能から「オフィス」機能への用途変換も必要のため、計画にあたってはここで働く予定の社員達に入念なヒアリングやワークショップを行い、より創造的なオフィスとなるよう進めました。



撮影：笹倉洋平

特集 フュージョン 融合する空間 ～新たな試み～

建築のハード面が社会をリードする時代は終焉を迎えつつあり、現代の建築プロセスは、ソフト面を今までより一層、重要視する時代となっているのは明らかである。むしろ、ソフト面がハードを牽引していくことに疑いは無く、建築のあり方も含めたこれからの建築プロセスは、異分野との関わり、クリエイターとの協働、あるいは、企画との連携、ビジネス戦略など、さまざまな形と「融合」してこそ成り立つと言える。

そこで、本特集では「Fusion（融合）する空間」と題し、具体的な事例を挙げて、それらの空間の目的や成立背景を探り、今後の新しい建築の作り方を模索する。これらの建築に内在する偶発性、意外性などを手がかりに、新しい建築プロセスが存在し得るかを見極めたい。

編集委員 間瀬一博



重森三玲「友琳の庭」岡山県吉備中央町 撮影：重森三明

総論

フュージョンする空間～公共空間の多様化 ～社交場としての能楽堂の再生～／服部滋樹

各論

風景というフュージョン 融合／花村周寛

団地リノベーションスタンダードへの挑戦 ～MUJI×UR～／長谷川晋一

HOTEL ANTEROOM KYOTO／ANTEROOM APARTMENT OSAKA

アート&カルチャーを愉しむホテル&アパートメント ～集まって暮らすという楽しみ～／中原典人

創造都市とワークプレイス ～異分野・異文化の人たちが出会い創発する場、

Creative Lounge MOV～／齋藤敦子

主観の行方 ～NEWLANDが出来るまで～／山本和豊

インタビュー 中川政七商店／中川 淳

編集後記

企画：インテリア・住宅系分科会

川合隆之／黒柳 亮／酒井雅男／谷垣浩一／塚口眞佐子／ペリー史子／間瀬一博／森岡拓也

フュージョンする空間 ～公共空間の多様化

～社交場としての 能楽堂の再生～

graf代表
デザイナー・クリエイティブディレクター
京都造形芸術大学 教授

服部滋樹

1970年生まれ、大阪府出身。
美大で彫刻を学んだ後、インテリアショップ、デザイン会社勤務を経て、1998年クリエイティブユニットgrafを立ち上げる。建築、インテリアなどに関わるデザインや、ブランディングディレクションなどを手掛け、近年では地域再生などの社会活動にもその能力を発揮している。

19歳の大学生の頃、街をフラフラと歩いたら、古めかしい看板に巡り合った。外観に惹かれ、偶然訪れた「Jazz Bar我巢灯」そこはジャズを中心にして、色んな人が集まる男達の社交場だった。

当時、美大生だった僕は彫刻をやりながら毎日そこで働いた。十代の終わりから二十代のはじめまで、ずっとその店で働き続けることができたのは、多種多様なお客さんから色んな事を学び、そこから受ける刺激が楽しかったのだと思う。それだけ居心地の良い場所はお客さんも店づくりに参加してくれているような感覚をもうけた。当然マスターは相当厳しい人だったのだが。神経を繊細に張り巡らせてお客さんのことを感じ取ってサービスをし、心地よい空間を作り上げていた。その場で起こることに対してすごく綿密に、身体感覚を100%使っておもてなしをしている。「おまえ、目の前に座っているカウンターのお客さんとお話しながら、奥のお客さんのグラスが空いたかどうかがわかるようになれ」と。水分がなくなったグラスは、氷がすれてカランコロンって小さく鳴る。カウンターで接客をしてもグラスを洗っていても、良い音楽が流れていても、神経を研ぎすませていればその音が聞き分けられるようになる。その音が鳴った瞬間、サッと走って行ってウイスキーを注ぐというきめ細かなサービスについて随分と学ばせてもらった。

良い空間を作る要素とは、照明の具合やソファの硬さ、ファブリックの質感、絵画など、様々なモノも当然あるとはいえ、その空間を心地よいものとして成立させるのはやっぱり人の力だなということを、マスターの徹底したサービスから学んだ。

卒業後はロンドンで彫刻の勉強をしたいと考えていた。その夢を応援してくれるお客さんの中にちょっと変わったご夫婦がいた。週に三度は来て下さって、いつも着物姿の30代半ばの御夫婦。バーの近所にお住まいで能楽の先生だという。「服部くん卒業後はどうするの?」と、ある時、先生からの質問。「日本の芸能文化を芸術の感性を持ったヒトが関わってくれたらいいね」と。「卒業後、私たちのと

ころへ経験にこない?」。その言葉に正直うしろ髪を引かれながら、古典芸能への思いを巡らせた。今まで想像もしなかった、能楽の世界。古典芸能の世界に足をつっ込むのも面白そうだなと感じたのは、その山本夫婦が魅力的だったからだ。価値感を共有し、それでいて歴史の間に関わり、芸術の中にある生活を共にすること。

交わされる気持ちの良い会話やもてなしを、お客さんからも受けることができた。ドアを開けて足を踏み入れた瞬間から、空間が生み出すムードが作用してお客さんがその空間を楽しみ、また気持ちの良い空間が生まれていく。場を楽しむにはある種のルールのようなものがあつた。もちろんマスターがルールを提示しているわけでもなく、エントランスから空間を彩る光や素材感といったものがそのルールまでをもコントロールしていたように思う。しっとりとした空間でゲラゲラと笑うのではなく、その場に合った仕草で時を過ごすとする。ムードによって、会話の質が変わってくる。それは店側とお客さんの関係だけではなく、お客さん自身がその空間の中で演出されているような、共有感が一体化しているように感じられた。ムードがイニシアチブを持ち、そこを訪れるお客さんと気持ちの良い空間を作り共有していく。

そんな空間を作る大事な要素はやはり人なんだなということを学んだ、我巢灯時代。

もっとも印象的な出会いをしたのが、山本能楽堂の能楽師山本夫妻だった。

そして、その後10年を経て再会し、今回の設計が始まった。

■100%を作らない

100%作らないということを意識する。80%程度に設計されているということが重要。関わる人たちに委ねる部分を20%残しておく。寧ろ20%の隙間が今回のテーマ「フュージョンする空間」に関連してくるのではないかと。「フュージョンする」と動詞形で何が動かししているのかというと、やはり空間がではなくてそこに関わる人が動かしていることになる。だから、「フュージョンする」には関わる人の能力にも問いかけている。建築が多様になり、空間が使いやすいものになればなるほど、ど

の様に隙間をデザインするのか？が問われるだろう。使い手の主体性を触発するような作り方が必要だと思う。

■ソフトとハード

能楽師の山本さん自身も場の開放には意識的で、様々なプログラムを作り、できるだけ裾野を広げようという試みをされている。子ども向けに能ワークショップを開いたり、アーティストと公演を行なったり、狂言とのコラボレーションで作品を作ったりもされている。ハードがソフトを規制するのではなく、ソフトのプログラム自体がより拡張性を持ち得るようにハードが補助していくような格好にならなくてはならない。最低限のルールがありながらも、そこからの拡張性が生み出される。シンボル性が高い建築世界では、やはりハードが優先されがちだ。

ソフトがハードを作るという試みで挙げられるのが、震災以降の公共建築。図書館が公民館としての機能を持つような転換方法。本がアプリケーションとして機能し、人が動き出すきっかけを作るのが本である。そして周囲から同時に新たなプログラムが生まれる。このようにアプリケーションが公共の場に設定されるケースは面白い。

運営に対して予算を確保するのではなく、本が作用して拡張性を豊かにしていくということを考えられている。公民館という一つのフレームで留まるのではなく、そこにアプリケーションが動き出すきっかけとして本を配置している。

これも、時代背景によって変化せざるをえな

い状況である。むしろ持続形態を考えると変幻可能であることこそが持続を意味している。

コンバージョンは建築のフレーム自体に変化はないが、使う人によって中身が変化する。しかし、今考えなくてはならないフュージョンとは、中身の機能を入れ替えるのではなく、その時代に合わせて何かが始まりそうなきっかけを用意すること。そのきっかけはそれぞれの時代背景に対応するものだろう。コンバージョンの場合は「入れ替わる」で、フュージョンの場合はそれをも取り込んで融合するということになる。ソフトにイニシアチブを譲るという考え方にシフトし20%残していた隙間がフュージョン（＝融合されるもの）のための余白として機能している。その融合されるものとは、時代に合わせて様々に変化するものである。それに合った空間の余白が、次なるソフトを生み出すためのスイッチとなる。

■公を開いていく

ユネスコ世界無形遺産の登録を受けた能楽は、サムライの芸能であり約650年の歴史を持つ。しかし、室町時代に作られた芸能は僕らの世代にとっては敷居が高く、難しそうなイメージがある。その能楽が上演される能楽堂は、崇高な格式高いイメージはあっても、同時に近寄りがたい雰囲気にあふれている。

しかし、大正から昭和の初めにかけて、大阪が東洋一の繁栄を極め「大大阪」と呼ばれた時代には、経済の発展とともに文化も繁栄し、能は今のゴルフ以上にたしなまれ、趣味として人気が高く、能楽堂は多くの人で賑

わっていたと聞く。能楽を稽古する仲間の中に、職業や社会的地位での上下はなく、同じ土壌で芸を研鑽した。発表会では同じ舞台上で日頃の練習の成果を披露し終演後、大企業の会長も平社員も一緒になって宴席を楽しんだ。その席上で、新しい人脈ができ、商談が成立するきっかけにもなり、まさしく能楽堂は「紳士の社交場」として個人の娯楽のレベルでも、また経済が生まれる場としても機能を果たしていた。

山本能楽堂は、そんな「大大阪」の真ただ中、昭和2年に大阪・谷町に創設された。まさしく、能を楽しむ人々が集い、能を中心として多種多様な人々が行き交う社交場であった。しかし、大阪大空襲によって最初の舞台は焼失してしまう。昭和25年、終戦直後のまだ敗戦による憔悴した気分が漂う中、「自分たちが楽しむための社交場を自分たちの力で再生しよう」と「船場の旦那衆」が力を集結して、山本能楽堂は再建された。がれきの中に簡素な舞台を設えて、地鎮祭で能の謡を奉納する人々。戦後間もない時期にも関わらず紋付き姿で正装した大勢の人々が誇らしげにずらりと参列した棟上げ式。残された当時の写真は、敗戦を乗り越え自分たちの時代をもう一度作ろうとする「大阪人」としての気概に満ちあふれている。

今回、改修のデザインをさせて頂くにあたり、拝見した再建当時の資料の中で、目に焼き付いた一枚の写真がある。シンプルな空間に漂う独特の緊張感。セピア色の写真から、研ぎ澄まされた空気と一緒に、大きなエネルギーのようなものまで伝わってくる。その時、



再建された山本能楽堂 昭和25年(1950)



地鎮祭

この写真の中に漂う空気感を再生したいと改修全体のイメージが固まった。

では一体、地域にとって能楽堂はどのような役割を果たしてきたのか。そもそも社交場であった能楽堂は、大阪の文化や大阪から何かを発信していこうという人がこの場所を訪れ、ここから新しい繋がりが生まれ、新しい創造が生まれて発信されていくそんな場所だと思っている。人が社交を楽しみ、コミュニケーションをとる場として、能楽堂が存在し、その中心に能があったのだ。今回の改修で、もちろん演者の方が舞台上立った瞬間からエネルギーが湧くような空間を作ることを大切に考えたが、同時にこの場所が現代の社交場としてどのように地域に開かれ、今後地域とともにどのように育っていくかを重視した。

■道具としての能楽堂

現在、改修工事は終盤を迎え、能楽堂の楽屋部分の改修を行っている。楽屋部分はもともと御家族や書生さんなど総勢約15人の大家族が住む生活空間でもあった。1階から3階まで、大小沢山の畳敷きの和室から構成されており、その時々家族構成や目的にあわせて、フレキシブルに使用されてきた。同じ空間が、ある時は、住居として、またある時は稽古場として、書生部屋として、楽屋として、宴会場として、多目的に様々な形で使い分けられ、利用され続けてきた。

今回の改修では、楽屋としての雰囲気は残しつつ、新たにライブラリースペースと収蔵庫としての空間を作る。90年近くこの地で「大阪・谷町の能楽堂」として地域住民に愛されてきた歴史の集積。その集積をライブラリーや収蔵庫に集結することで、今までになかった新しい機能を付け加えることができる。能楽堂の90年という積み重ねられた歳月を大阪の文化の歴史とともに体験できる空間を作ることで、能楽堂がさらに地域に開かれ、能楽堂を軸として新たな人々の交わりが生まれ、地域によって育まれる新しいスペースとしての可能性が無限に生まれてくると考えている。

時代の経過とともに、娯楽や趣味が多様化し、現在は、能楽そのものが次の時代に向けて新たに革新していく分岐点の時期に来ていように思う。また、山本能楽堂の活動は、

現代アートとの協働など、他の一般的な能楽堂とは少し異なり、現代の視点に立って能の普及と伝承につとめている。能楽堂の一つの大きな道具に見立て、能楽堂が目指す方向に最もフィットした道具として能楽堂全体を改修していくことで、能そのものの意識や在り方も変革されて、新しい未来に向かっていければと願っている。

すっぽりと手の中に収まる使い込まれたお気に入りの道具のように、能楽堂そのものがひとつの大きな道具として、様々な人々に使われ、みんなで共有することができる、使いやすい道具として機能していけば、能楽堂が現代に生きる開かれた社交場として大きく変化していくような気がしている。使えば使うほど、新しい輝きが増されていくのだ。

■非日常と日常の間

能楽堂は劇場であるが、一般的な劇場とは違った面も数多く持つ。通常の劇場では、毎日様々な公演が開催され、非日常な世界が繰り広げられ、人々は非日常を体験するために劇場に出かけていく。しかし、能楽堂は能が上演される専用舞台として存在するが、上演される以外にも、能楽師自身の稽古場として使用され、また一般の方の稽古場としても開放され、また若手の育成のための教育の場としても機能してきた。同時にそこは大家族が暮らす生活の場でもあった。山本能楽堂もそうではあるが、ほとんどの能楽堂は個人の所有から始まっており、いわば生活空間の建物の中に能舞台があるという意識の下、運営がなされてきた。

能楽堂は、ハレの場とケの場、即ち非日常と日常が絶えず入り乱れる特殊な空間ということが言える。生活をデザインしていく中で、僕は人が暮らしていく衣食住を軸とした日常を大切にすると同時に、日常の中に非日常のわくわくとする魅力や推進力を恒常的に生み出し、日常を更新していくことが重要であると考えている。しかし、能楽堂は瞬時に日常と非日常が入れ替わる特殊な空間である。意図的に非日常な状況を作り出さなくても、生活のリズムの中に非日常な要素が常に溶け込んでいる。人に夢を与え、人をもてなす空間であると同時に人が集い、くつろぐ場所

もあり、同時に修行のための厳しい空間にも早変わりする。一つの空間を、その多様な機能によって、非日常と日常を瞬時に使い分け、使いこなせる空間に改修し、日々変化する日常と非日常の中で、たえず意識が更新され、新しいエネルギーが生まれていく生活空間を作ることが大切だと感じた。

■チームでつくる

今回の山本能楽堂の改修では、設計監理の安井建築設計事務所と協働で、3年間さまざまな検証を行いながら、アイデアを熟成させ、現場でその時に考えられる新しい可能性をたえず追求しながら設計・デザインを行ってきた。文化庁の補助事業であるため、入札により施工は、1年単位で、松井建設、金剛組、田尻工務店に行ってもらった。今まで関わらせて頂いたことのない日本建築のエキスパートの方々と毎年タッグを組み、新しい可能性に挑戦しながら、魅力を感じ続けた3年間であった。毎年プロジェクトが生まれ変わるように、絶えず新しい価値観が現場に反映されていき、その違いや関わりを楽しむ事ができ、よい環境で改修が行えたと思っている。

文化財という古い建物の予測不能な現場で、その時々最大の可能性を見つけてその方向に進んでいったのも、最初から明確なヴィジョンを決めずに、変化に応じてチームで考えていくことができたからだと思う。そして、試行錯誤しながらも、最善の選択を繰り返し、積み重ねてきた空間には、変化を受け入れ続けたことの結果として、その場に立つだけでその集積が理屈抜きに面白く感じられるパワーとエネルギーにあふれた場所に、新しく生まれ変わりつつあり嬉しく思う。

■隙間をデザインする

デザインをしていく上で、「隙間をつくる」ということは僕にとって常に重要なテーマだ。ものづくりやデザインする上で、普通は100%完成させる事が目標になってしまっている。100%完成したモノは確かに使いやすく美しいが、それに触れた瞬間から次第に輝きが失われていくように感じている。僕はそれとは逆に、使えば使うほど輝きを増していくモノを作っていきたいと強く願う。例えば、使い

続け触れていくうちに、徐々に輝きが生み出されていく。実はそこに大きなヒントが隠されており、人が長く使い続けていくことのできるモノは、手にした瞬間からその人の経験やさまざまな色を加えられその魅力が増していくように、作られているように思う。長く使われるものを作りたいと思った時に、80%程の完成度であれば、あとの20%を使う人それぞれの感性で埋めていくことができ、その結果、その人自身のモノとして、長く使えるものへとモノは生まれ変わるのではないかと考えている。中途半端に完成させないのではなくて、あえて20%の隙間をデザインする。すると80%の完成度で手渡した先に、自分が想像している100%を超えて、使い手が120%使いこなしてくれているケースも現れる。そうした瞬間に100%を越えた200%の部分が僕らに対しての次なるミッションとなり、作り手と使い手の間に対話が生まれ、モノを介して新たな価値観が育まれていく。

デザインする事が目的では無く、デザインは手法なのである。目的はその先に存在する。

建物や空間も、使い手が介入できる隙間をデザインすることが必要であり、その隙間こそ、次の可能性が生みだされていく。当然、能楽堂の改修も完成して終わりなのではなく、能楽堂を一つの大きな道具に見立て、道具全体としてデザインした上で、あえて隙間のデザインを残しておくことで、さまざまな人によって隙間の部分がそれぞれに工夫がなされていくだろう。そして、その関わりが多ければ多いほど、クリエイティブなコミュニケーションが生まれ、その隙間の部分に多くの知性が集積し、それによって考えもしなかった新しい可能性が生まれ、さらに大きく育っていくことができる。そのためには、訪れる人がその場で理屈抜きに感じ取り、感性を豊かに成長させ、関わりたいと思う空間を作ることが大切だと。隙間を作ることによって、多くの人が関われば関わるほど、長く大切に使われる空間へと成長を続ける。

■社交場としての能楽堂の可能性

山本能楽堂は、「自分たちの社交場」を自分

たちの手で作りたいという、大阪人の気概で作られた劇場である。長年継続して使われてきた能楽堂が、現代の感覚にフィットする新たな社交場として再生し、未来に向かって開かれていくためには、この隙間こそが大切だと考えている。隙間があることで、クリエイティブなコミュニケーションが生まれ、多種多様な人々が集まり、またそこから新しいアイデアが注ぎこまれ、更新され、共有する場所として、空間が育まれていく。能楽堂が地域のランドマークとして、地域に開かれ、そこで育まれたコミュニティ自身が成長していくためにも、隙間は重要な意味合いを持っている。シビックプライドと言うが、多くの人々が関わりを持つことで、その主体的な動きは「地域の誇り」として、能楽堂全体がシンボリックな存在になり、社交場としての能楽堂の果たす役割の重要性が増し、芸術としての能は可能性が大きく広がっていくように願っている。

■フュージョン(融合=フューズ)する空間

能は伝統芸能でありながら、同時にインプロビゼーションの要素を持つ。そもそも、自然環境を背景に状況が変化する舞台だ。伝え続けられてきたことをそのまま間違いなく再現するのではなく、その時々、一期一会の芸のぶつかり合いを楽しむ芸能である。ある意味「隙間」が内包され、だからこそ、その時代の空気とともに変化しながら650年間、連綿と上演され続けてきたのだろう。

そして、能楽堂は芸術の創造の場でもある。隙間をかかえた不完全な場所は、創造が生まれるためのエネルギーを無限に生み出す可能性にあふれている。芸術が新たに創造されるためのそのきっかけを、隙間部分が担うことになれば、今までに関わったことのない新たな人が交差し、様々な価値観を持った人によって全く新しいコラボレーションが生まれ、芸術のさらなる融合が行われていく気がしている。「もしかしたらこういう事ができる



現在の山本能楽堂

かもしれない」という思いを隙間部分に残すことで、人々の想像力をかき立て、新たなコミュニケーションが生まれ、そこからまた新しいアイデアや芸術が生まれる「循環していく仕組み」を、今回の改修に意図的に組み込めればと思った。そして、その隙間によって、能楽堂が大きな一つの道具として、多くの人に使い込まれば、日々気持ちが新たに更新され、感性を豊かに成長させる空間へと育まれていくのではないかと。

また、新しく能楽堂に行き交う人々によって、新たなコラボレーションワークの仕組みが生まれ、全く違う領域から新しいアイデアが生み出されることにより、今までにないような状態が作りだされ、新たな芸術が創造される事を期待している。能楽堂が一つの大きな道具(モノ)になった時、そこに行き交う人々(ヒト)によって、新しい出来事(コト)が起こってくる。「ヒト、コト、モノ」がバランス良くフラットに交わる事によって、新しい関係性が生まれ、さらなる融合がすすむ。そして、その振れ幅が大きければ大きいほど、可能性は無限に広がっていく。能楽堂は大きな道具として、何でも許容できる懐の大きな空間に生まれ変わることができた。

今回の改修によって、能楽堂が「現代の社交場」として、さまざまな価値観を持つ人たちが行き交い、協働することによって、知性の集積が行われ、意識の変革が生まれる可能性にあふれた場所になればと願っている。気になる映画を観に行くように、気軽に能楽堂に行くことのできる未来を夢描きながら。

(はっとり しげき)

風景という融合

ランドスケープアーティスト
大阪府立大学准教授

花村周寛

「風景異化論」をベースに、インスタレーションを中心とするアート作品の制作やパフォーマンスなども行う。2012年に大阪赤十字病院で取り組んだ「霧はれて光きたる春」が世界最大規模の空間環境系デザインアワード『DSA Design Award 2012』で大賞と日本経済新聞社賞を受賞。また“活版印刷工場”をシェアビルドしたアトリエ「b (フラット)」を中心に、領域横断的に創造性を共有する実験的なプロジェクトを行っている。
大阪府立大学21世紀科学研究機構観光産業戦略研究所・准教授。大阪市立大学都市研究プラザ特任研究員。大阪大学工学研究科建築学科非常勤講師。一般社団法人 プリコラージュ・ファウンデーション代表理事。

■風景をデザインする

僕はいわゆる造園をベースにしたランドスケープデザインを学んだが、人にとって風景とは何だろうということを今でもずっと考え続けている。木を植えて道を作ることによって「空間」は生まれるかもしれない。しかしそれで果たして風景が生まれたと単純に言えるのだろうか。風景設計という領域をまともに考え始めると、空間と風景との間にはいつも乗り越えがたい断絶が横たわっている。風景とは僕らを包囲する全てのモノのカタチで、それは人が作ったものもそうでないものも含めて様々なものが融合された全体的な様相だ。そして風景は朝目覚めてから夜眠るまでずっと連続していて、人が生きている限り常にそこにあるものだと言える。そうかと思えば、風景は気分や体調によってふいに現れたり消えたりする刹那的なものとも言える。さらに眠っている時にも夢という風景を見ていることもあるし、全盲の人々にとっての風景もあるということは、風景とは視覚的なものに限ったわけではないのだろう。そう考えれば風景とは自分と関係する全ての世界と言う事が出来るかもしれない。それをデザインするということは一体どういうことなのだろうか。それは世界をデザインするという壮大な問題にまで踏み出していかなければならないかもしれない。だから「風景をデザインする」というこの短いフレーズの中に、実は僕たちが生きていく上で大きな意味があるのではないかとことをずっと考え続けている。

■「形」と「象」の融合

東洋古来のランドスケープデザインである風水には「在天成象、在地成形」という言葉がある。これは「天に在りては象を成し、地に在りては形を成す」という意味で、僕らが目にする“カタチ”と呼ぶものには「象」と「形」の二つがあるということを指し示している。「象」というのは水や空気や雲といった柔らかに捉えどころのない“ふわり”としたカタチを指していて、「形」というのは岩や地形のように固くて揺るぎないカタチだといいかえても良いかもしれない。僕が思うに、建築はどちらかというところまで「形」を重視したデザイン領域であったのに対して、造園は自然を相手にしてきた性質上「象」を重視し

てきたのではないかと考えている。例えば樹木を計画する時に、「物体」として取り扱うのか、それとも苗から成長して大きく変化していく「生命」として取り扱うのか。一見、少し立ち位置が違うだけの微妙な差異のように見えるが、実はこの設計者の“まなざし”の違いはどの時点で空間の完成を考えるのかを指し示している。空間を揺るぎないハードな「形」として捉えるのか、それとも移ろいゆくソフトな「象」として捉えるのかによって何を設計の対象とするのかという意味合いがまるく変わって来る。

今は建設によるインフラ整備の時代が一通り落ち着き、技術的・機能的には空間を整備することは何でも可能になった。だからこそ移ろいゆく我々人間のカタチに対して空間がちゃんと寄り添っているのかどうかということを考えねばならない時代なのだと思う。インターネット上のヴァーチャルな世界の出現に象徴されるように今や人間のカタチさえも目に見える「形」に対して、状態としての「象」が重なりあっている時代である。この変化はデザインのみならず、おそらく今世紀の人間存在における大きな課題になるのだろうと密かに確信しているが、そうすると人が生きていく空間の設計についてもこれまで建築がしてきたようなアプローチとはまるで異なる方法論が必要になってくるのかもしれない。

■空間から環境への融合

地球規模での環境問題が台頭してきて以降、「空間」から「環境」という概念へ移行しつつあり、その変化はデザインの対象に影響を及ぼす。空間と環境というのは単なる言葉の違いだけではなく、物事の捉える態度の違いだと考えているが、では空間と環境とは何が違うのか。

建築家のバックミンスター・フラーは「環境とは自分を取り巻く全てのもの」を指すと述べている。自分を中心にしてその周囲にある全ての事象を環境だと捉えれば、厳密な意味での空間だけをデザインの対象に出来なくなる。空間という言葉にも様々な対象を含めた広がりが出て来ているが、余計な意味を削ぎ落してシンプルにすると物理的空間というのは床面、壁面、天井面からなる「物体」で出来ているという事実が浮かび上がる。物体をデザインする事が空間をデザインすること

であり、建築やインテリアの領域は空間を構成するの^{マテリアル}に^{マテリアル}どうい^{マテリアル}う物体を用い^{マテリアル}れば^{マテリアル}いいのか^{マテリアル}ということ^{マテリアル}を洗練^{マテリアル}させてきた。

しかしそれを環境という視座から捉えた途端に、空間は物体だけではなくより様々な要素と融合^{フュージョン}せねばならなくなる。自分を取り巻く環境には床や壁といった空間を構成する物体だけではなく、その空間で起こる出来事まで含まれているからだ。その空間でどんな人がどんな風に動いているのかという人の振る舞いは環境の中の「象」である。物理的な身体を持った人というのは環境や空間の構成要素であり、もし街から人の姿が全く消えてしまえば、同じ空間であったとしても全く違ったものとして感じられるだろう。人がその場でどのような「象」を成しているのかという「状況」のデザインが、ソフトプログラムという抽象的な言葉の本来の意味だ。日常的に人がどのような象を成しているのか、また非日常的なイベントやアクシデントはその象をいかに変容させるのか。それは全てその場で人が織りなす「状況」を定めて行くということだ。空間の運営や利用という機能的な側面以上に、どうい^{カタチ}う「状況」をその空間にデザインする^{カタチ}のかという^{カタチ}のがソフトやオペレーションを設計する^{カタチ}という背後に潜んでいる本質なの^{カタチ}だと思う。

「象」に対してアプローチをするようになれば、空間に満ちている人以外の「現象」も設計の対象となる。例えば光の状態が異なれば同じ空間であっても全く違う場所となる。近代技術によって室内の場合は照明等の演出が自由自在に可能になったが、ランドスケープが対象としている屋外では光は基本的に太陽という現象に左右される。だからそういった既に取り巻いている現象を無視して空間や風景を成立させることは不可能なのだ。光だけではなく、音や温度や微生物といった無数の現象は常に空間に溶け込んでおり、それらは全て環境を構成している重要な要素である。こうした現象のコントロールは空間設計の問題ではなく設備設計の問題としてこれまで取り扱われて来た。しかしその空間にどうい^{フュージョン}う「現象」があるのか^{フュージョン}ということ^{フュージョン}は、そこで人々がどうい^{フュージョン}う「状況」を生むのか^{フュージョン}ということ^{フュージョン}と関係している。空間から環境という次元へ融合^{フュージョン}させることで、空間を構成する「物体」だけでなく、人々が織りなす「状況」や、自

然が引き起こす「現象」までデザインの可能性が開かれるが、それは風景へと近づく重要なアプローチになってくるのだと思う。

■環境から風景への融合^{フュージョン}

ではこうした環境がデザインされれば風景^{ランドスケープ}が生まれるかという^{ランドスケープ}とまだ違和感が残っている。環境と風景の間には依然乗り越えがたい断絶があるように思えるのだ。ここには何が足りないのだろうか。

美学者のアラン・ロジェは環境と風景を区別して、環境とは科学の範疇の言葉だが、風景とは美学の範疇の言葉だと述べている。数値で計測出来る「環境」と、個人的な美醜の問題である「風景」には確かに違いがある。また地理学者のオギュスタン・ペルクは「風景」とは“主観的”な言葉で、「景観」とは“客観的”な言葉だと述べているように、風景とは個人の内部の判断が重要になる。そして先ほど挙げたバックミンスター・フラーは“自分を除く”全てのものである「環境」に対して、“自分を含めた”全てのものを「宇宙」としている。これらに共通しているのは風景を捉える“自分”という存在である。風景とは自分の内部の“まなざし”と関係^{ランドスケープ}して^{ランドスケープ}いて、環境と向き合う自分の状態^{ランドスケープ}という^{ランドスケープ}のが風景^{ランドスケープ}という言葉には含まれていると僕は考えている。

それはLandscapeという言葉の成り立ちを見ても明らかだ。Landscapeという言葉はLandとscapeの二つの言葉に分ける事ができる。Landは「場所」を意味しており、scapeは「景・眺め」を意味しているが、その二つの関係性が風景^{ランドスケープ}であるという事をこの言葉は指している。つまり風景^{ランドスケープ}というのはその場所を眺める人が居ないと定義上成立しない。逆に言えば、ある場所に対して誰かがまなざしを向けて初めて風景^{ランドスケープ}というのがその間に成立すると言える。だからまなざしが向けられないものは単なる空間や自然でしかなく、誰かのまなざしが向けられ関係が切り結ばれた時に風景が生まれる条件が整うという事が出来る。そう考えれば、風景をデザインするの^{ランドスケープ}に場所や環境の設計だけではなく、それを眺める人のまなざしとの関係性を設計する^{ランドスケープ}というアプローチがあり得るのではない^{ランドスケープ}かと思う^{ランドスケープ}（図1）。

これは空間の運営や利用を作るソフトプログラムとは少し異なった考え方だ。同じ環境

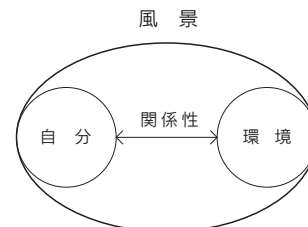


図1 風景の成り立ち

であったとしてもそれがどのように眺められるのかということによって風景は変わるはずである。視覚的なアングルや視点場を変えるだけで同じ環境でも風景は違ってくる。電車の窓の位置を変えるだけで、きっと同じ路線を走っていたとしても全く違った風景を見る事が出来るに違いない。あるいは飛行機から見下ろす眺めというのは同じ街であったとしても全く違う風景になる。それだけではなく、眺める人間の知覚を増幅したり変換するような道具や技術が開く風景というのもあり得る。望遠鏡というツールが無いと僕たちが眺める事が出来なかった風景があったらうし、自動車や列車の車窓に流れて行く眺めは“速度”を生む技術が達成したこと^{ランドスケープ}で手に入^{ランドスケープ}った風景^{ランドスケープ}だと言^{ランドスケープ}える。何よりこの100年の間に生まれた映像というメディアが僕らの知覚を大きく変換させ、今や目にする風景の半分以上はき^{ランドスケープ}っとパソコンやテレビのモニター越しの風景^{ランドスケープ}なの^{ランドスケープ}だと思う。場所の方は全く変化しなかったとしても、それを眺める人間側の知覚や身体が変化すれば場所に対して違った風景が立ち現れる。風景をデザインする^{ランドスケープ}といった時^{ランドスケープ}には、場所に対する身体的なまなざしとの関係性を設計する^{ランドスケープ}ということも含まれるのではない^{ランドスケープ}か。

そして身体的なまなざしの設計があり得るのであれば、精神的なまなざしの設計もあり得るのではないかと不遜な事を考えている。身体の状態が異なれば風景が異なるように、精神の状態が異なることで違った風景が立ち現れることがあり得ると思うからだ。それは経験や知識や感情といったことと場所との間の関係性の問題だ。例えば同じ場所であったとしても、それを眺める人によって違った風景が現れている^{ランドスケープ}ということは十分に考^{ランドスケープ}えうる。もし同じ山に植物学者と動物学者と鉱物学者が一緒に入^{ランドスケープ}ったとすると、同じ環境だ^{ランドスケープ}ったとしてもき^{ランドスケープ}っとそれぞれには違^{ランドスケープ}う風景が見^{ランドスケープ}えて^{ランドスケープ}いること^{ランドスケープ}だろう。異なる知識や異なる経験を持つ^{ランドスケープ}ということはある環境へ向けるまなざし^{ランドスケープ}が異なる^{ランドスケープ}ということが言^{ランドスケープ}える。そして、それ

は自分という一人の主体の中でも起こりうることである。今の自分と、ちょっと前の自分、そしてちょっと先の自分は異なった“まなざし”を持っていることがある。ある情報を知ってしまったとか、ある経験をしてしまったとかということが影響して、同じ場所でも全く違った風景に見えるということはある。ホラー映画を見た後では暗い夜道が恐ろしい風景として迫って来るのは誰しもが経験したことがあるのではないと思う。

こうした環境を捉える人間の内部の状態も含まれた「風景」の次元の問題を、僕はデザインという角度から捉える事が出来ないかと模索している。自分の内部の状態も含めた風景というのは、フラワーが言うようにほとんど「宇宙」ということを指していて、そのようなものを果たしてデザインの対象にすることが本当に可能であるかどうかは分からない。しかしこの「象」の時代において、空間の問題を考えた時に風景の次元まで融合する可能性に踏み出すことに僕は何らかの実存的意味はあるのではないと思う。

■風景を異化する

風景というものが自分の内部の状態に依存している以上、風景は現れたり消えたりする。つまり気分によって同じ場所でも違った風景が現れることがあるだろうし、特にずっと同じ場所に接しているとそれを風景として眺めることがなくなったりすることがある。例えば、毎日接しているものや、毎日歩いている道は発見がだんだんと少なくなっていくという経験はないだろうか。普段僕らが空気を意識しないのと同じように、人はずっと同じ環境と接しているとそれがだんだん当たり前になり、次第に意識から遠のいて風景ではなくなってしまう。つまりLandとscapeとの関係がずっと同じ状態で続いて固定化すると風景は消えてしまうのだ。しかし面白いのは、一旦そうして消えてしまった風景がまた何かの契機にフッと現れたりすることもあることだ。そうやって無意識に接していたものが、ある時に新鮮な状態として立ち上がってくる瞬間に風景が生まれる可能性があるのではないかと僕はそれを意図的に起こすためのデザインという角度から実践と研究をおこなっている。そうした固定化されたLandとScapeとの関係性が何らかの形で違うものとして組み替わる

ことで、そこに再び新しい風景が生まれることを僕は「風景異化」と呼んでいる（図2）。

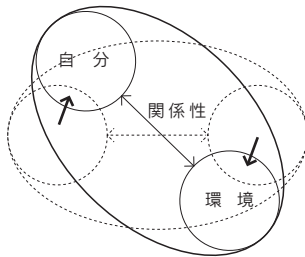


図2 風景異化

異化（Ostranenie）という言葉は元々演劇や言語学の中で出て来たと言われているが、これまで見慣れてしまって新鮮さを失ったモノやコトに対して再び新たな関係性を築くことだと僕は理解している。場所（Land）とそれを眺める人のまなざし（Scape）との関係性に異化が起こることで新しくなれば、そこに新しい風景が生まれるのではないかというのが僕の仮説だが、その方法は場所のデザインにだけに限らないと思う。場所と人との関わり方や、その場所を眺める人の「まなざしをデザインする」というアプローチも新しい風景を生み出す可能性がある。

■まなざしのデザイン：ガリバースコープ

まなざしのデザインというのを一体デザインの対象にするのか。僕のワークショップ作品の一つ「ガリバースコープ」を例に説明したい。これは日常的なモノに人形を立てるというシンプルなワークショップだが、そうすることで写真のようにたちまち違った風景がそこに現れる。マンホールのように毎日踏みつけていて気にもとめないような存在になってしまっているものは、関係性が固定化してしまっていると言える。まなざしが向けられないので、もはや風景では無くなっているが、これを異化することによって再び風景としてまなざしを向けるようになる可能性がある。この作品は大人や子供問わず色々な人を対象にしているワークショップだが誰でも簡単にまなざしの変革を体験出来る。



毎日遊んでいるはずの場所が全く違った風景として感じられたり、何の関心も持たなかった場所でも一度このまなざしを手に入れると想像力が働き、特別な意味を帯び出す。

このように普段接している空間であっても、それが風景としての関係が切り結べていないような場所に対して、眺める人のまなざしの方へちょっとした操作を加えることで新しい風景として関係を結べるようになる方法を「まなざしのデザイン」と呼んで実践している。

まなざしのデザインとは、いわば風景の補助線をデザインすることだと言ってもいい。



数学では図形問題を解く時に補助線を引くと言う考え方があるが、補助線を一本引くだけで見えなかった関係性が浮かび上がって来るというようなことがある。僕が「まなざしのデザイン」と呼んで行っている実践は、風景に対して補助線を引くことで見方をデザインしているということも出来る。僕らは身の回りの環境に対して目には入って来ているが、見えていないことがある。それを見えるように補助線を引くことで風景があらわれるきっかけを作ることが出来るのだ。

■まなざしの交錯：霧はれて光きたる春

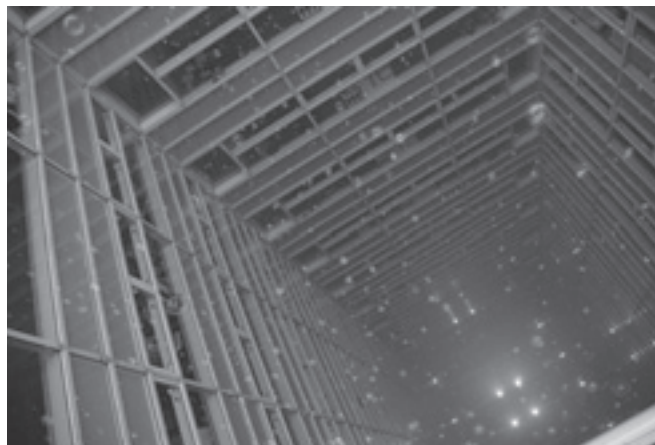
こうやって異化やまなざしというアプローチから風景のデザインに取り組んでいるが、自分の中でも手応えのあった作品の一つに病院での取り組みがある。2007年頃から大阪市立大学医学部附属病院で数年アーティストとして関わらせて頂いたが、その中でも3年度目に取り組んだ「霧はれて光きたる春」という作品は最も印象深く、その後も別の病院で継続している。その市大病院の事例を少し取り上げてみたい。

市大病院は800床を超える大規模病院で、医師・看護師・職員をあわせれば1500人を越す人々が毎日過ごす場所である。入院病棟は6階から18階で階毎に違う病棟が入っているので、入院する病棟が異なればまず他の階へ行く事はほとんどなくいつも同じ風景の中に居ることになる。患者さん達の心の中は毎日の検査や手術で自分の身体の心配に加えて、治療がうまくいっても社会復帰に問題がないか、その後の再発に問題がないかなど、将来についての不安が絶えないはずである。そんな中で病室での限定されたコミュニケーションを越えて、全ての人々が一同に視線を交わすような体験をもし持てれば、患者さんたちは少しでも孤独や不安から開放されるのではないかと思った。同じ病院の中に状態は異なるが自分と同様に病氣と闘っている人がたくさんいて、そういう人々と何か一つの出来事を共有している状況は、その人にとって忘れたくない風景になる可能性があると思ったからだ。唯一それを表現出来そうな場所が病院中央に位置する吹き抜け空間だった。ここは全ての人々が一同に介してコミュニケーションを交わす可能性のある場所だったが、単なる光庭としての空間で誰も意識を向けてはいなかつ

たのだ。しかしそういう空間こそ異化することで風景へと昇華する必要があると感じた。

僕がこの作品で用いた素材は不安の表現である「霧」と希望の表現である「シャボン玉」だった。霧をゆっくりと下から上げて、それがだんだんと晴れて来る頃に空から光を受けたシャボン玉が降り注ぐという「現象」をこの吹き抜け空間に1日30分間、音楽とともに与えることにしたのだ。不安を通り抜けた後にやってくる希望を現象として表現したのだが、この現象は人々の「^{カタチ}象」を変えるトリガーとして考えていた。これまで病室に居た全ての人々はこの現象を見るために窓辺にやってきて、全員が空を見上げ始める「状況」が生まれる。吹き抜けという向いあった空間では立ちこめる霧やシャボン玉という現象の向こうに人々の表情や姿が同時に見える。そこには患者さんだけではなく医師も看護師も職員も、その時に病院で過ごす全ての人々が横並びになってシャボン玉が降り注ぐ空を見上げる状況を生み出すのだ。その場で人々は、それぞれの立場や役割や社会的な意味をリセットし、一人の個人として振る舞う「象」を生み出している。その「象」に自分が参加しているという体験はきっとその人の中で長く残る風景として実を結ぶのではないだろうか。

社会の中での人の振る舞いというのは、立場や所属する組織やその場での役割が決める



事が多い。人は社会的に与えられた役割を演じる事で、誰かと社会的な関係を築いて行く。特に病院という場ではその役割がはっきりとされている。それぞれが役割を果たす事で共に病氣と闘い、病院としての機能をうまく働かせているのだ。しかしコミュニケーションを考えた時に、果たしてその役割は個人と個人との関係性として交わされているものだろうか。不安な入院生活の中でこそ、機能的な役割を乗り越え一人の人間として交わされるコミュニケーションが必要なのではないか。そう考えた時に医師や看護師や患者といった院内での役割そのものも異化するような風景を生み出すことが重要だと感じたのだ。



吹き抜けそのものは普段とは何ら変わっていないただの四角い空間だ。しかしそこで現象をデザインし、人々の空を見上げまなざしが交錯する状況をデザインすることで、その空間は風景となるかもしれない。そしてこのインスタレーションが終了してからも、きっとその吹き抜け空間に対する想像力はそれまでとは違ったものとなっているだろう。

空間は人が生きていくのに欠かすことが出来ないものだが、それだけで人は生きていけるわけではない。大切なのはその空間と関係を切り結ぶ中で、いかにして豊かな意味をその場に獲得するのかということだと思う。そのためには空間という枠組みを風景へと融合^{フュージョン}しデザインすることに可能性があるのではないだろうか。（はなむら ちかひろ）

団地リノベーション スタンダードへの挑戦

～MUJI×UR～

独立行政法人都市再生機構 西日本支社
技術監理部 ストック技術チーム 主幹

長谷川晋一

1970（昭和45）年 大阪府東大阪市生まれ。
1992（平成4）年 鹿児島大学 工学部 建築学科 土田充義研究室卒業。
1992（平成4）～2004（平成16）年 設計事務所に『温故“都”新』住宅を提案・実践。
2005（平成17）年～ UR都市機構にて、
・都心の賃貸に住まう
・まちの資産と団地建替え
・団地リノベーション
という流れの中、主に団地の設計・施工に携わる。

■新たなリノベーションの潮流

●公団～UR

都市再生機構（以下、UR）が管理・運営している「団地」は、1955（昭和30）年の日本住宅公団設立以降、生み出されてきたもので、現在、約1,700団地75万戸ある。

その歴史を振り返ると、高度成長期の大規模住宅供給から始まり、再開発事業や団地の建替事業など、単なる住宅供給でなく、時代ごとの社会的課題に取り組み続けている。

●社会的要請

現在、築年数の古い住戸については、設備機能の不十分さ、和室ばかりの間取り、古めかしい色味などマイナス要因で語られることが多く、その解決手段のひとつとして、住戸内を一新するような大規模な改修が住戸再生の大きなトレンドとなっている。

しかし、更なる環境負荷低減が求められる中、団地資源を前向きに見つめ直し、今あるものに価値を見出したストック活用が求められるようになってきた。

そこでUR西日本支社では、2011（平成23）年に京都府の観月橋団地において民間事業者と連携した既存ストック再生である「観月橋プロジェクト」を実施し、設計コンセプトを「機能の継承」として、豊かな屋外空間をもつ団地の住戸が通風や採光に優れていることをしっかりと自覚した上でリノベーションに生かした。

しかしながら、当該プロジェクトでは住戸の状況が千差万別であったため、元々ある内装材をより生かすことについては、均質な商品を量産するという観点から、また、限られた検討時間という制約から見送られた。

●古いものを大切にしたりリノベーションの量産化

UR西日本支社では、この経験を新たな主要課題の出現と捉え、団地の魅力をひき出し、古いものを大切に生かしながら、スタイリッシュな住宅に生まれ変わらせるリノベーションに取り組むこととなった。

その起点が郊外型大規模団地において2012（平成24）年4月から新たに商品供給を開始した「暮粹（くら・しゅく）」であり、更なる

可能性の探求をめざして「無印良品」を展開する（株）良品計画の住宅部門会社ムジ・ネット（株）と連携した「MUJI×UR」を2013（平成25）年3月から供給し、リノベーションによる新たな賃貸住宅スタンダードへの挑戦が始まった。

■リノベーションブランド

「MUJI×UR」

●企画コンセプト

団地空間と親和性のある「暮粹（くら・しゅく）」ブランドのバリエーション化を模索する中、「永く使えるものは使いつつ、豊かな暮らしを実現していく」というURと共通した考え方を持つムジ・ネット（株）と共同で推進することとし、次のようなプロジェクトへの思いを共有した。

- ①団地での暮らしの良さを新たなリノベーションを通じて伝える。
- ②古いものを大切にしながら新しい価値を与えるリノベーションを提案する。
- ③「賃貸＝借りて住む」ことの楽しい選択肢をもっと増やす。

これらは、今後のURの「新たなリノベーション」の方向性を示す軸となるものではないかと考えている。

●設計手法

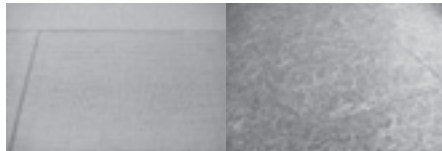
団地らしさとは何かを徹底的に拾い出した上で「こわしすぎず、つくりすぎない」ことを柱とし、既往の判断基準にとらわれることなく、①生かすところ、②変えるところ、③住まい手が自由にできるところを設定し、それらをかけ合わせる、組み合わせるという作業を繰り返した。

最大の特徴は、色調・設えともプレーンに仕上げ、間仕切り襖や押入れ襖を取り払うことなどで、現代の様々なライフスタイルに対応できる（住まい手にゆだねられる）ようスタイリッシュかつ素地としての住まいの提案を行っていることである。

このような作業から、①組合せキッチン（新しい住まい方を提案するダイニングテーブル付き）、②麻畳、③オリジナル木製引戸、④麦わらパネル（床材）の共同開発パーツが生み出された。



組合セキッチン



麻畳

麦わらパネル

●プラン

リバーサイドしろきた

Re+001 ゆるやかに仕切る住まい

Re+002 ひとつながりの住まい

泉北茶山台二丁

Re+003 光と風が抜ける住まい

新千里西町

Re+004 床に座ってのびのびと暮らす

Re+005 シェアする住まい

※Re+ : Renovation collabo



Re+001 リビングダイニング

●施工

リノベーションにおいて最も大切な施工では、職人も含めたみんなで新しい価値を共有するために、「このタイルは残そう」、「このすき間は埋めよう」などと現場での徹底した議論を実施した。この作業は、計画・設計・施工部門が一丸となった新たなリノベーションにおける施工精度のスタンダードをつくる作業でもあった。

●プロモーション

共同プロジェクト開始以降、良品計画(株)の

SNSネットワークを活用したWeb上での展開を重視し、情報発信と設計・施工を常に並行して行うことで一連の流れを生み出した。

WebやSNSは、団地の歴史的背景やこれからの未来の「物語」を伝えるのに非常に有効なツールであった。



Re+001 プラン図



Re+004 リビング

●募集結果・成果

2013(平成25)年2月の第1期募集(全22戸)では平均当選倍率5.6倍、低層階より上層階(4、5階)の倍率が高い、申込者の20代と30代の合計が約8割という結果となり、同年10月の第2期募集(全14戸)でもほぼ同様の結果となった。

このことは、団地の若年層への訴求、エレベーター増築を伴わない「住戸リノベーション」による上層階への入居促進という大きな成果であると考えている。

●まとめ

MUJI×URでは、これからの日本の暮らしは「モノをあまり持たずに、ゆったりと暮らす」というスタイルに変わっていくはずだという思いをかたちにした。

- ・団地という豊かな屋外空間
- ・住みつながれた日本の集合住宅

- ・今まであった、今ある日本の暮らし
- ・簡素だけど素材そのものを上手に使った贅沢な空間(モノ)

これらを融合させ、今まで見つけられなかった見たことのない絵(空間)が創出できた。

■ストック再生の行方

個人主義的な住思想から、ともに暮らし、絆を重視する傾向が強まる中、ふたたび団地が果たすべき役割や期待、団地が我々の暮らしを豊かにしてくれる可能性が高まってきている。

また、大量消費社会の終焉に伴い、今あるものの価値を見出したうえで、新たな工夫をつけたしていく手法は強まっていくものと考えられる。

●プランニングやパーツ開発からの展望

住まい手が住まい方の変化に応じて、より手軽に模様替えが選択できるリノベーションパーツの開発や情報発信を進めることにより、賃貸住宅でありながら住まい方の幅を広げ、暮らしの中により多くの楽しみや彩りをもたらすことができるのではないかと考えている。そのベースとなる「古いものと新しいものをつなげるデザイン」、「見えないもののデザイン(=感受性や想像力を引き立てる空間デザイン)」を高める余地はまだまだある。

●団地コミュニティへの展望

デザイン密度の高い技術的な団地リノベーションにより若年層への訴求ができ、ミクストコミュニティのきっかけが形成された。

これらに合わせて、さらに団地コミュニティのリノベーション(ミクストコミュニティの育み)が待ち望まれている。居住者をつなぐ様々なイベントのプロデュースを通じて、団地の記憶を未来へ住みつなぐという視点での各種取り組みも始まっている。

我々URは、これらを上手くかけ合わせて、今までの50年から次の50年へとつなげる「なつかしい未来へ向かうリノベーションデザイン」を実践していきたいと考えている。

(はせがわ しんいち)

HOTEL ANTEROOM KYOTO/ ANTEROOM APARTMENT OSAKA アート&カルチャーを 愉しむ ホテル&アパートメント ～集まって暮らすという愉しみ～

UDS株式会社
Creative Design Director

中原典人

1968年北海道生まれ。
和設計事務所にて、都市計画・図書館等公共
建築の設計を行う。
1999年に都市デザインシステム入社（現
UDS）。コーポラティブハウス、集合住宅、
戸建などの住宅をはじめ、ホテル・商業施
設・オフィスなど建築に加え、インテリアデ
ザイン・家具のプロダクト等もトータルで手
掛ける。ジャンルにとらわれず、新築からリ
ノベーションまで様々な手法により、独自の
空間を幅広いデザインにより表現する。
東京建築賞奨励賞・グッドデザイン賞・ま
ちなみ100選優秀賞など受賞多数。

■HOTEL ANTEROOM KYOTO

●コンセプト

「京都の今を表現するアート&カルチャー
が集まる場所～変化を楽しむ新しいスタイルの
ホテル～」という今までにない新しいコンセ
プトのホテル。それが、「HOTEL ANTEROOM
KYOTO」。

HOTEL ANTEROOM KYOTO の
「ANTEROOM（アンテルーム）」とは、「次
の間」や「待合室」のことを意味する。世界
中から京都を訪れる人々に、友人の家に遊び
にきたような居心地の良さと京都の街へ出る
ための支度をする場を、そしてアパートメン
ト暮らしの人々のために、新しい刺激に満ちた
日々を通じて次の出会いへとつながっていく
ような暮らしの場を提案した。

ラフで造りこまれていない空間に、アパー
トメントの日常（暮らし）とホテルの非日
常（旅）が混在することで常に変化していく
“街”、“暮らし”、そして“カルチャー”が感
じられる新しいスタイルのホテルとなった。

●アート&カルチャーを発信する仕掛け

このホテルには、アート&カルチャーを発
信する仕掛けが3つある。

それは、「複合」・「ギャラリー」・「余白」で
ある。「複合」としては、単なるホテルではな
く、アパートメントを併設させている。ホテ
ル61室に対してアパートメント50室。ホテ
ルのゲストだけでなく、アパートメントで暮ら
す人々が、ホテルの共用部を自由に利用でき
るようにしている。友達を呼んだり、仕事を
したり、様々な使い方ができる。そうした人
たちの間で、ホテルの共用部を通してコミュ
ニケーションが生まれ、アートやカルチャー
をテーマに自主的な発信が促される仕掛けに
なっている。

「ギャラリー」については、キュレーター
を巻き込んだ期間展示としている。ギャラ
リーはホテルエントランスにあるため、一般
の方も自由に出入りでき、ギャラリーを通し
てホテルを知ってもらうことができる。これ
が、アートやカルチャーを口コミで発信して
もらうきっかけとなっている。

最後に、全体をつなぐ「余白」である。余
白を利用して空間を自由に構成できるので、
イベントを開催したり、ギャラリーを拡張し
たり、発信する場づくりをニーズに合わせて

変化することができる。デザイン的にも押し
つけるのではなく、むしろ余白を残してアート
やカルチャーが自然発生的に生まれる仕掛け
とした。

そうして、ここで生まれた京都の今を表現
するアートとカルチャーがつながることで、
居心地の良さや京都らしさが感じられるよう
にと意識している。特に海外のゲストには日
本らしさを感じてもらいたいと考え、伝統工
芸のディテール・素材等をさりげなく表現し
た。まさに、日本の繊細な美の表現である。



余白を残したロビー

●余白の可能性

空間としては装飾を極力排除し、スケルト
ンをシンプルに表現する計画とした。これは
時代の流れや変化に合わせて、空間も変化でき
るように考えたためで、インテリアは置き家
具によって構成している。オープンして3年
が経つが、当初計画していた家具配置や空間
構成は変化し、当初とは違ったものとなって
いる。これこそ目指していたことである。



古材を使ったテーブル

例えば、ロビー手前にあった大きなテー
ブルがロビーの奥に置かれるようになった。理
由はギャラリーの空間を広くするためで、そ
れはギャラリーが実際にアートやカルチャー
を発信し、当初考えていた以上に需要が高
まってきたためである。一方、ロビーの奥に
移動されたテーブルはその空間をバーへと変
化させ、そこに集う人の中心的存在となっ

ている。まだ3年の月日しか経っていないが、余白を創ったことにより、様々な変化が生まれ、空間が成長している。今後の変化も楽しみだ。

●空間構成

空間構成に関しては、ホテル全体を大きな邸宅としてとらえて計画した。大きなロビーはリビング、レストランはダイニング、客室は個室という具合だ。エントランスを入るとまず正面に大きなアートが存在する。これは京都を中心に世界的に活躍している彫刻家・名和晃平氏の作品だ。その左側「ギャラリー9.5」ではクリエイティブな人々を巻き込んだ期間展示を展開しており、時にはロビー・レストランまでアートが浸食することもある。写真右側はホテルのチェックインカウンター。既存の建物で使用していた下足入れをリメイクして壁に吊るしている。アーティストによるペインティングでどこことなく歴史を感じるディテールとなった。



エントランスアート
中央: "Swell-Deer" 2010, ©Kohei Nawa
左: ©Taisuke Koyama

ロビーを抜けた長い廊下には京都らしいアートが点在し、ゲストを楽しませている。廊下の左右にはバーラウンジとレストランとなっており、昼はラウンジ、夜はバーとして利用されるバーラウンジには、ゲストにお気に入り場所を探してもらうようにとそれぞれ形状が異なる家具を配置した。レストランも同様に様々な家具を配置し、好みの場所を探してもらう仕掛けをしている。

レストランやバーラウンジでは時にはイベントを開催し、コミュニティの場としても利用されている。こうしてロビー、ギャラリー、ラウンジ、レストラン、それぞれの空間が余白で緩やかにつながりながら、そして変化しながら構成されている。

■ANTEROOM APARTMENT OSAKA

●コンセプト

「大阪の今のアート&カルチャーに触れ、

新しい感性に出会える住まい」

アート&カルチャーを切り口に、様々なスタイルをもった人々が集う「開かれたコミュニティ」のあるシェアハウスとして、新しい刺激に満ちた日々を通じて次の出会いへとつながっていくような暮らしの場を提供することを目指した。

●コミュニティを育む仕掛け

多種多様なライフスタイルに対応するため、様々な居場所を創ることをプランニングテーマとした。親しい友人との会話から大人数でのパーティーまで一人の人間が求めるコミュニティの大きさは日常の中でも変化する。メインリビングの他、リラクゼーションラウンジ、カフェラウンジ、ライブラリー、スタディースペース等、様々なスタイルに合わせた居場所を計画した。

また、アートを通して住民同士のコミュニティが生まれるように、屋内の様々な場所にアートを配した。そして、多様なイベントをメインリビングで開催することで、住民同士のコミュニティがより一層豊かになるように考えた。アートを感じる暮らしは住宅にとっては「非日常」であるが、同時に住宅として「日常」を過ごせる場所も必要だと感じた。コミュニティを育む仕掛けをハードとソフトの両面で仕掛けることで、住民同士の新しいコミュニティを期待したい。

●施設計画

施設計画を考える上で、最も大事にしたポイントはHOTEL ANTEROOM KYOTOと同様に余白を残した場所づくりである。特にこの計画建物は商店街に位置しながら歴史が感じられる築79年のビルであり、その貴重な価値を生かすプランが必要だと考えた。入口のメインアプローチの空間にはあえて何も創らず、アート作品のみで表現することがこの施設に求められた答えだと考え、若手アーティストの児玉真人氏と小宮太郎氏による屋外彫刻のみを設置した。商店街から建物のアプローチに入った瞬間、現代アートが目飛び込んでくるという演出である。「なぜ、ここに現代アートが?」という驚きによって印象づけられたアートが地域や住民に影響を与え、口コミのようなコミュニティが生まれる仕掛けとなっている。

エントランスを入ると屋外のアートと屋内のギャラリーがつながり、その先にはアトリ

エがある。ここは住民の創作の場やアーティストのためのサテライトアトリエであり、住民以外の外部とつながるコミュニティを創出する場でもある。

ここで制作されたアートが施設

内の随所に配され、アーティストとも日常でつながっていくことになる。

リビングは建物の風格に合わせ、歴史が感じられる古材を使ったテーブルやアンティークの家具を配置し、どこか懐かしい雰囲気を醸し出す。各所に異なるスタイルのソファやテーブルを置くことで気分や用途で場所を使い分けられる工夫もしている。

空間としては住民のライフスタイルに合わせたインテリアが主体となるよう、スケルトン部分については何も仕上げを施さないシンプルな計画としている。

リビングと隣接したキッチンはシンメトリな空間の中心に大きな作業台を配置し、コミュニティの中心として象徴的なデザインとした。結果的に施設全体としてもキッチンが中心となってコミュニティが生まれているといっても過言ではない。そして、そこからカフェラウンジやライブラリー、スタディールームとつながり、建物全体を小さなコミュニティから大きなコミュニティまでつなげる役割をしている。



ダイニングキッチン

建築のハードとソフトの融合を考えた時は、むしろ、ソフトがリードすることで、豊かなコミュニティが生まれる仕掛けができると感じている。

(なかはら のりと)

創造都市と ワークプレイス

～異分野・異文化の 人たちが出会い創発する場、 Creative Lounge MOV～

コクヨ株式会社RDIセンター
主幹研究員
WORKSIGHT LAB. 所長

齋藤敦子

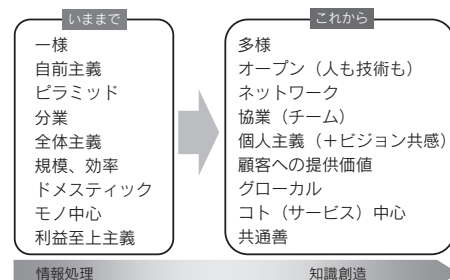
1968年 新潟市生まれ。
多摩美術大学デザイン科立体デザイン卒業。
コクヨ株式会社に入社、設計部を経て現職。
経営と働き方の視点で次世代のワークプレイ
スの研究開発に従事。
オフィスデザインを手がけた「Link &
Motivation」日経ニューオフィス賞 経済産業
大臣賞を受賞。
企画開発を担当した「Creative Lounge MOV」
グッドデザイン賞 受賞。
社団法人日本ファシリティマネジメント協
会：オフィス・ワークプレイスの知的生産性
研究部会 部会長。

■都市と経済のリ・コンストラクション

経済発展と共に高層化・拡張してきた都市は、高齢化やエネルギー問題、さらに環境汚染や自然災害等のさまざまな課題に直面している。成長し続けてきた経済も停滞し、21世紀に入ってから都市と経済の新しいモデルの模索が始まった。これまで経済発展を象徴してきた機能中心の都市が、持続可能な仕組みづくりへとシフトし始めているが、スマートシティやクリエイティブシティはその表れだろう。

インターネットで人と情報が世界中どこでもつながる今は、リアルでホットな体験や偶然の出会いが街の魅力となる。これからの都市は、そこに住み働く人が豊かであると同時に、多様なコンテンツやビジネスが生まれるエコシステムが持続可能性をもたらす。都市の多様性については、アメリカのジャーナリスト、ジェイン・ジェイコブズ氏が4つの条件を挙げている。「1：混合一次用途の必要性」「2：小さな街区の必要性」「3：古い建物の必要性」「4：密集の必要性」これらは今のクリエイティブシティの原型とも言えるが、多様な年代、規模、コンテンツが混ざり合うことは都市の魅力だけではなく、企業経営にとっても共通するテーマであることが興味深い。

厳しいグローバル競争の中で企業が新しい商品やサービスを生み出していくために、先進的なグローバル企業の多くが「ダイバーシティ&インクルージョン」という概念を掲げている。国籍や年齢や性別はもちろん、経験や価値観の異なる社員が互いにアイデアを出し合い新しい知を生み出すことでビジネスを進化させていく。イノベーションのためには組織の中に多様性を取り込むことは必須であり、これからは一社に閉じずに外部に開かれた場が求められるだろう。



組織とワークスタイルのシフト

■世界に広がるコワーキング

多様性と寛容性に富んだシリコンバレーは、世界中から優秀な人材と経験者、資金が集まることでベンチャーが次々に生まれるエコシステムを持ち、長くにわたってベンチマークされてきた。だが、リーマンショックや東日本大震災以降、世界各地で新たな創発の場が試行されている。その一つが「コワーキング」という働き方とワークプレイスである。新しいビジネスを生み出すためには異なる分野の知識やリソースを掛け合わせることが不可欠だが、組織の壁を越えて個人のつながりから創発的に協働していく働き方が今、注目されている。

ロンドンで生まれた「THE HUB」というコワーキングのネットワークは、社会起業家が集まる会員制ワークスペースを拠点に、グローバル展開している。他にもオランダの「Seats2meet.com」など、ソーシャルキャピタルを活かしたコミュニティ型ワークスペースが急速に増えている。ドイツのメディア「deskmag」によると、2012年時点でコワーキングスペースの数は世界で2000程あると推定され、日本も200以上は存在しているようだ。それぞれ運営形態やビジネスモデルは異なるが、利用者は個人事業主やベンチャー、クリエイターのみならず、大企業の新規事業や経営企画に携わる個人の会員も増えている。

これまでも個人事業主やベンチャーが小割りオフィスを利用するサービスオフィスは存在していたが、なぜコワーキングスペースが急に増えたのか。それは産業構造と働き方の変化が大きく影響している。20世紀のモノづくりを中心とした産業は、大きな生産施設を持つメーカーが垂直統合により大量生産を行ってきた。しかし、インターネットやデジタルファブリケーションの浸透によって、個人がメーカーになれる時代がやって来た。また、農業や観光など従来の産業とICTが結びつくことで付加価値の高いビジネスも生まれつつある。これまでのサービスオフィスは、空間やビジネスサポートを提供し小さな組織がオフィスを構えることを支援してきたが、ビジネスや社会の変化により、異質な個からなるコミュニティとネットワークを提供できるコワーキングスペースが感度の高いワー

カーのニーズを満たし始めているのである。ワークスペースの役割は時代と共に進化し、オフィスビルディング事業にも影響を与えていくだろう。

■渋谷という街の文脈を活かした企画

働き方とワークスペースはこのように進化しているが、Creative Lounge MOVを計画していた当時は、クリエイティブシティやコワーキングという言葉は未だ知られていなかった。だが、サービスオフィスやシェアードワークスペースは2003年頃から多様化し始めており、都市におけるワークスペースの変化について研究をしていたところ、縁あって渋谷の再開発事業に関わることになった。

渋谷はマーケットとしては世界中から注目されている都市のひとつであり、周辺エリアも含めて海外からの旅行客も多く訪れる。ケータイやアプリのテストマーケティングの際、若者の街である渋谷を選ぶ企業も多い。その渋谷に大規模オフィスが現れたとき「オフィス街」としてどう進化させるかを通常は考えてしまう。最近の都市開発はどの街も複合化を目指しており、そこに独自性がなければ差別化は出来ない。渋谷ヒカリエの8階は計画当初からクリエイティブ人材育成の場としての構想があった。そこで意見交換をしているうちに、渋谷だからこそ出来ることをやろうという方向に進んでいったのである。

「渋谷で働く」ということはどういうことか。働く街としてまず頭に浮かぶのが丸の内であり、IT企業といえば六本木のイメージがあった。これらの街と対抗するのではなく、新たなカテゴリをつくることで都市全体が魅力的になる。渋谷の特徴はマーケットの街であることと、クリエイティブの多様さである。渋谷周辺にはクリエイティブ系の事務所が点在しており、ファッション、音楽、グラフィック、コンテンツ、メディア等、多様性に富んでいる。また、青山や代官山、六本木などクリエイターに好まれるエリアや、田園都市線など住まう街とのターミナル駅でもある。渋谷の多様性とつながることでコトとビジネスが生まれる、街の多様性を活かした働き方が「渋谷で働くこと」なのだという結論に至った。そして渋谷から世界へ発信してい

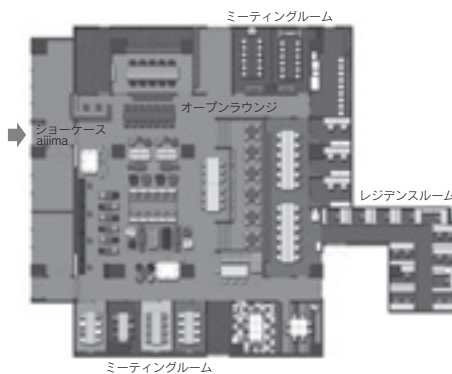
くというイメージが固まっていったのである。

■Creative Lounge MOVの誕生

MOVのコンセプトは「異文化・異分野の人たちが出会い、ビジネスやプロジェクトを生み出す場＝クリエイティブラウンジ」である。MOVというネーミングの由来は‘ムーブメント’であり、従来のオフィスではなくムーブメントを起こしていく場であるというメッセージを込めている。シェアオフィスという言葉をあえて使わないのもこのためである。

MOVは4つのスペースで構成されている。中央にはMOVのコンセプトを体現したオープンラウンジ。このラウンジを囲む形でミーティングルームとレジデンスエリア、外部に開放されたショーケースaiiima（アイーイマ）がある。メンバーはそれぞれのニーズに合わせて会員種別を選択できる。

2012年春、渋谷ヒカリエの開業と同時にMOVは誕生し、オープン当初からコンセプトに共感していただく人が絶えず、会員数も増えている。また、ショーケースaiiimaは、‘合間’をコンセプトとし1～2週間単位で新しいモノコトを紹介したい人に貸出している。展示に合わせてワークショップやイベントが行われており、ショーケースがあることで毎月新しい人たちがMOVを訪れ、多様性にとんだコミュニティが育まれている。



Creative Lounge MOV

実際にMOVで出会った異分野の人たちでビジネスを生み出したり、地域やアジアで活動する人たちがMOVを媒介にコラボレーションを始めたりと、新しいムーブメントが起こりつつある。異文化・異分野の人たちが会おうきっかけとなるコミュニティ形成には、ソフトの部分が欠かせないが、MOVではメンバーのための定期的なパーティや会合、会員同士

のゆるやかなマッチングの機会を提供している。オープンして約2年経った今は、スタッフとメンバーのコラボレーションによってパーティ企画が決まる等、参加型の場としても進化している。



■都市の魅力とワークプレイス

前述したように都市と経済、企業の未来像を切り離して考えることはできない。既存の枠組みやリソースだけで新しい商品やサービスが生まれないのはすでに述べた通りであり、企業にとっても都市にとっても、多様性と寛容性は重要なキーワードである。日本企業はこれまで終身雇用が根付いていたため1つの組織文化しか経験のないワーカーが多く、異業種のコラボレーションは難しかった。しかし、これから高齢化社会となりアジアとの連携が求められる中で、人もリソースも柔軟に行き来できるような仕組みに積極的に取り組んでいかなければならないだろう。便利でフラットな社会になればなるほど、新しい遊びを求めるのが人間であり、予定調和ではない驚きや感動が街も経済をも活性化していく。

オフィスは、真面目に働く場所であるという日本企業にありがちな考え方を一度リセットしてみてもどうか。ワークプレイスが創造的な場所であれば、個人も企業ももっとクリエイティブな仕事ができるはずだ。魅力的な都市とは、多様な人たちが有機的に働き、学び、遊び、暮らしている様である、MOVを通して実感している。

(さいとう あつこ)

主観の行方

～NEWLANDが出来るまで～

dessence 代表

山本和豊

1976年 埼玉県生まれ。大工の父の影響を受け幼少時代は物作りに明け暮れる。
1999年 CDLを設立。同時に5年もの間、各国を旅し異文化の建築に触れ影響を受ける。
2005年 株式会社 Dessence に改名し、法人化。住宅、商業空間、オフィス、プロダクトを中心にデザイン及び施工を行う。
2010年 経済産業省主催「JAPAN DESIGN +」上海派遣デザイナーに選ばれる。
2013年 「JCD Design Award 2013」 GOLD AWARDと吉村靖孝賞を受賞。

Exhibition
DESIGNTIDE TOKYO 2008 (TOKYO MIDTOWN HALL)
DESIGNTIDE TOKYO 2009 (HAPPA)

■違和感からの始まり

私は埼玉県の熊谷市で10年以上前からインテリアショップ兼建築事務所を運営しています。そこで起きていた些細な「違和感」。それらが与える今後の日本の消費への影響を危惧してやまない。その思いからNEWLANDの一步は始まりました。

過剰にあふれた情報の中でメディアに翻弄され主観を失い、健全な消費活動が出来ない世に対しての小さな希望になることを望んで。

■廃墟からNEWLANDへ

NEWLANDは埼玉県熊谷市の江南という自然に囲まれたエリアにあります。元々はクレーンの教習所として使われていた建物が、施設の引っ越しと共に、10年以上無法地帯と化していました。これまで、私達は多くの廃墟や工場跡など、人の手により生まれてしまった負の財産の調査及び視察に足を運んでいました。そこで出会ったのがこの場所でした。

私達には場所を探す際、ある条件がありました。それは「何もない」。様々な商業施設や文化施設は、多くの土地に根付いたインセンティブを持っています。それは、駅、温泉、特産物、産業、観光などの商業施設をフォローし、時として非常に強いものにすると同時に、それらに依存する形が色濃く出ます。私達が目指す施設はインセンティブに頼るのではなく、そこに住む人々とそれを取り巻く人々のクリエイティブによってインセンティブを生み出せる場所でした。従ってこのNEWLANDがある江南というエリアはまさに理想の場所でした。

ただ、だからといって今後の発展に向けて無視できないものや、考慮していかなくてはならないものは多くありました。一つは「交通網」です。地方では想像以上に「車」が移動手段の中心にあります。その車での来客に対して、今後、開かれていくであろう高速道路網とこの立地は良い組み合わせでありました。そして、もう一つはこの場所が「廃墟」であること。それらは人が作り上げた負の産物であり、いずれ自らの手によって清算しなければなりません。私達はNEWLANDの取り組みによりマイナスからプラスへ、場の持つ

要素をシフトチェンジできないかと考えました。

このような基本構想から始まったNEWLANDへの取り組みですが、昭和47年に建築されたこの建物たちは、様々な問題を含んでおりました。それらを行政との細かい折衝により、ひとつひとつ丁寧に解決を図り、あたりまえのようですが「建築物へ建築行為ができる」という段階へ進むことが出来たわけです。

そして、設計へ進んでいくにあたり、私達は全ての施設を当社で設計するのではなく、多くの設計者に協力を仰ぎ、参画して頂きました。それは当社のみで設計するのではなく他の人格が場に介入することにより、より自然な多様性のある場が生まれると考えていたからであります。この場では、当社の設計のみで進めることは設計者の自己満足であり、本当の意味での多様性が希薄になると感じたためです。そして、参画して頂いた設計者へは各建物に対してのコンセプトを提示するとともに、共有してもらわなければならない事柄がありました。それは「最小限の解体行為」であります。負の産物であるこの施設を大きな解体行為でコンバージョンを図るということに拒絶感があり、特に私達世代がこれらの建物に対して新しい表現のあり方を提示することも大事な使命と感じていました。従って、削る、足す、というよりは「寄り添う」というような表現の建築を進めていきました。

■NEWLANDの施設構成

NEWLANDは「HOUSE」、「SHOP」、「SCHOOL」、「DOGRUN」、「GARDEN」の5つの施設によって構成されています。

建物に限っては、法律に従い除却する部分以外は殆ど解体せず、290坪の元教習事務所の「HOUSE」は入り口の向きを変えること、そして差し込む光をコントロールし、盛土と植栽によって新しい表情を与えました。そして、240坪の元倉庫の「SHOP」は建屋内に新しい建物を配置し、ひとつひとつの建物の高さに注意を払い、まるでジオラマに迷い込んだような錯覚を起こすウィットさを施し、小さな町を作り上げました。元合宿寮の「SCHOOL」は外部と内部が繋がる円形のウッドデッキを施し、屋外の関係性と屋内の

まずはこの施設にはゴミ箱がありません。環境への配慮だけが取り上げられがちですが、本文は全く違い、ゴミ箱をなくして各店舗のスタッフにゴミの処理を自らお願いすることにより、自発的なコミュニケーションを促すのが目的です。ですから、各店舗はしっかりとゴミ箱が設置されております。次はバリアフリーですが元々施設が持っている段差や側溝のズレ等は既存のままです。その目的は、小さな子供たちが自ら危険を察することへの重要性を知ったり、体が不自由な方には周りの人々が自ら配慮をしていく思いやりを持つことなど、精神性への訴えかけであります。最後に、施設までの看板です。過剰に行う誘導は便利であると同時に、何か一つの価値やモノを手にするために使う労力とのバランスを崩すと考えています。これほどまでにインフラが整備されていない時代はインターネットも何もありません。ですから、私も経験したことでありますが、場所やモノを探す労力が、時として場やモノの価値を高め感動を導くと思っています。クリックひとつで何でも



NEWLAND SHOP棟

分かってしまう時代だからこそ、ローテクとハイテクの使い方が重要であり、多くの看板をつけることが「育つ場所」ではなく「売りつける場所」になってしまうのではないかと危惧しています。

まだまだ多くの要素があるのですがここでは紹介しきれないのでこれまでと致します。このように多くの見えない要素を多く含んだ施設のため、非常に受け入れがたい一面を持っていますが、この過剰消費の時代にはこのような投げかけが必要かと思っています。

■違和感の解消に向けて

ここまで大まかではありますが多くの事をお話させて頂きましたが、冒頭で上げている「違和感」について何も説明がないと思われるかと思いますのでお話します。

現代ほど「便利」という言葉が似合う時代はないと思われるくらい便利の一言につきま
す。車両、鉄道、インターネット、などなど
瞬時に移動し、瞬時に情報を得られる。そん
な日本はある意味素晴らしい国だと思います。
その過剰にあふれた情報とメディアコント
ロールにより、本来自分が何を欲しているの
かさえ定かではない。これが現状です。

冒頭でもお話しましたが、私達はインテリアアショッブを運営しております。イームズが日本で大流行した際には、インテリアアショッブに並ぶ人が現れたくらい大きな動きを見せました。その流行とともにインテリア業界は、イタリア、イギリスの魅せるコンテポラリーデザイン、日本の民藝にも通じる北欧デザイン、強いコンセプトに基づくダッチデザインと多種多様な流れを汲んできました。本来、家庭で使う家具は、パーソナルにあたるものと考えています。その個人的主観によって選ばれるべき家具が、それも何十年と愛され続けている名作たちが、一過性のものであるかのように扱われることに怖さを覚えたのを思い出します。そのズレのような感覚が冒頭の「違和感」であります。その「違和感」がどのようにしたら解消されていくのか。これは私個人の中でも非常に消化不良を起こしており、悩んでおりました。なぜなら、このような時代が続いていくことは、クリエイティブなモノやコトが生活から離れていくことであり、



NEWLAND HOUSE棟

それは本来の豊かさとかけ離れる生活である
 と思ったからです。

そして、もっと内面、いや、心の深淵にまで降りて考察する必要性を感じ動き始めました。観光、特産物、産業がない…でも人々はそこで生活をしているわけです。あたりまえですが。そこからが重要と捉えました。

荒廃した工場や倉庫。不良物件として扱われているビル、商業施設。素晴らしい可能性を秘めている場が放置されている地方の現状。そこに観光や特産物、産業に依存するのではなく、その地域の特性を細かく分析し、そこから抽出された「魅力」を最大限に利用し、コミュニティと一緒に豊かな生活を創り上げ、そしてより多くの人々へ「豊かさ」を発信していくことの重要性。

素嗜らしい物とは「何か」を伝えるのではなく、その「何か」との出会いの場を提供し、幅広い層に対し日々の生活の中で本当に豊かな暮らしの「気づき」を生み出し、そして自らが豊かな暮らしのための「何か」を選択していく。それは「感性の教育」と「感性の自律」でもあります。

すなわち文化的・精神的豊かさの底上げができる土壌を作り、近隣のコミュニティと連携を図りながら「良き物」に触れ「良き事」を感じられる場を創り上げる。

国土の約20%が都市、80%が郊外といわれる日本。観光や特産物、産業が著しく乏しい地域こそ日本にとっての新しい経済市場の創造の場であり未知数の魅力を秘めています。

「感性の教育」と「感性の自律」から生まれてくる文化が、停滞している地方経済に対しての長期にわたる潤滑剤になり、本来あるべき姿の理想の経済活動へとシフト行くことを望みます。

(やまもと かずとよ)

インタビュー 中川政七商店

株式会社中川政七商店
代表取締役社長
十三代

中川 淳

1974年生まれ。

京都大学法学部卒業後、2000年富士通株式会社入社。2002年に株式会社中川政七商店に入社し、常務取締役として「遊 中川」の直営店出店を加速させ、日本初の工芸をベースにしたSPA業態を確立する。2003年に新ブランド「粹更kisara」を自ら立上げ、2008年に十三代社長に就任。

「日本の工芸を元気にする！」というビジョンの基、業界特化型の経営コンサルティング事業を開始し、初クライアントである長崎県波佐見町の陶磁器メーカー有限会社マルヒロでは2010年6月に新ブランド「HASAMI」を立ち上げ空前の大ヒットとなる。

著書に「奈良の小さな会社が 表参道ヒルズに店を出すまでの道のり。」「ブランドのはじめかた」(日経BP社)「老舗を再生させた十三代がどうしても伝えたい 小さな会社の生きる道。」(阪急コミュニケーションズ)「ブランドのそでかた」(日経BP社)。

「日本の工芸を元気にする！」をビジョンに掲げ、奈良から全国に良質な商品を発信している「中川政七商店」。一方で他社のコンサルティングをされている13代目社長の中川淳氏に、モノづくりにおける「融合」の可能性を伺った。

■「想い」を「らしさ」に

一ものづくりのコンサルティングで大切にされていることは何でしょうか？

コンサルティングでは、最初のステップとして「自分たちを知る」ということをしてもらいます。もちろん「強みを知る」ことも大切ですが、それに加えて「どうになりたいか」という話を掘り葉掘りききます。みなさんだいたいひとつ目には、「産地全体を元気にしたい」など、いいことを言うのです。でもそれはあくまで建前であって、もっと個人的な想いがあるはずなのです。どういう時にテンションがあがるのか、そのひとがグッと感じるところを探していきます。そのひとの「想い」と、その会社の本当の「強み」みたいなものを足し合わせて、ブランドの根幹をつくっていきます。

この「想い」が大切です。例えば、焼き物の産地にある小さな工房が生き残っていく手

法は、マーケティング的な発想では、答えは「こうすべき」という一つになると思います。でもそれは違って、100の工房があれば100の想いがある。だから、僕は答えが一つではないと思っています。

その「想い」を引き出すのが、なかなか難しく、はっきりしていないときは、何のためにやるのかということを改めて考えもらい、一緒に成熟させていきます。それがないと「共感」が生まれません。

ブランドというのは、商品だけではないし、付加価値みたいなものでもないし、いろいろなものが詰め込まれたひとつのイメージというか、価値観みたいなものです。それが「共感」できるものでなければいけません。「儲けたいだけ」では、そこに共感は生まれません。例えば当社で言うと、「日本の工芸を元気にする！」というビジョンを、きれいごとではなく本当に実行しているからこそ、共感が生まれるのだと思います。まずきちんと行動する。そして、それができたあとは、商品や取材などの雑誌媒体、WEBなど、いろいろなかたちでお客さんへ発信をする。それらをお客さんが頭の中でごちゃごちゃとまぜて、この会社はこんな感じ、というのが、まさにブランドイメージです。その想像のところをつく



中川政七商店本社

るには「想い」というのがすごく大切なのです。

商品のデザインが良くなれば売れるというのは、基本的には間違っていると思っています。それで売れるのであれば、この30年来、国が各産地にスーパーデザイナーを派遣して、いろいろ作ってきたものが、全部売れているはずです。オリエンテーションなど一切なしに「先生の言うとおりに」というようなスタイルでやっているから売れないのです。僕が最初にコンサルティングをした長崎県の波佐見町という焼き物の産地も、価格競争力があって、ステップも軽い産地なので、これまで数々のデザイナーが入っているのですが、ことごとく失敗していました。そこに、僕たちはデザイナーレスで立ち上げましたが、結果的にあれだけ売れているわけです。デザインを良くして敗れるというか、デザインが目的化するというか、デザインが最後のものさしになるというのは、大きな間違いだと思っています。僕たちは、「想い」みたいなもの、「らしさ」を正しくお客さんに伝えるための手段としてのデザインを心掛けています。それは商品もそうですし、ロゴやグラフィックもそうですし、すべてが、「想い」がなくして、あるいは「らしさ」、伝えたい事がなくして、

デザインはできないはずなのです。価値観を表現したかたちになる。だから答えは一つではないはずです。マーケティング的な考えのように「この価値が普通に売れます」という話ではありません。

■粒と粒をつなぐ「組み立て」

—「想い」をかたちにする手法についてお聞かせください。

それを「筋のいい組み立て」とよく言っています。一つ一つの想いや強みや特徴は「粒」です。その粒がたくさんあればあるほどいいのですが、そのままではただの粒です。ですから、粒の羅列は響かないし、残らないし、忘れられます。この粒を何個かだけでもつなげることが出来たら、ストーリーになるわけです。そうすると、話がよくなる、筋がよくなる。これが、長ければ長いほど、そして太ければ太いほど抜群にいい「筋のいい組み立て」になります。

例えば、「2 & 9^{NI TO KYU}」という当社の靴下のブランドの話です。僕は以前から靴下に興味がありませんでしたが、男性ものは選択肢が少なく、あまり満足していませんでした。ある時、靴下工場にたまたま行くことがあり、工場の人と話していると、あまり元気がありません。

奈良は国内の靴下の50%以上のシェアがある一大産地なのですが、奈良発のブランドはなく、みな下請なのです。そのせいもあって、現状に満足しておらず、つい愚痴をこぼしているのです。それを見ていてなんとかもう少しいいかたちにならないかと、漠然と考え始めました。

そこで、靴下の勉強をしてみると、靴下を2足並べると「11」に見えるので、11月11日を「靴下の日」と日本靴下協会が定めていることを知りました。しかも、2011年は靴下が奈良県で初めて作られてからちょうど100周年ということで、11がたくさんつながる2011年11月11日は「超靴下の日」ではないか、ということに気づいたのです。「じゃあ、ここを目標に靴下をやろう」と考え、工場の人たちが誇りに思えるような奈良発の靴下ブランドの立ち上げを決めました。

靴下ブランドの名前には、奈良発ということ、奈良の誇りになるということで、総務省が定めている奈良県の県番号を利用しました。例えば東京は11番で、奈良県は29番です。靴下ですし、日本語ではなく、なんとなく数字がかわいらしいと思い、「29」というのがブランド名としてあがりました。good design companyの水野学さんにグラフィックを依頼す



デザイナーレスで立ち上げた波佐見焼のブランド「HASAMI」



代表取締役社長 中川淳氏

るとき、こんな感じでやろうと思っているの
でお願いしますとお話しするなかで、水野さん
が「2と9を足したら11だ」と気づいて、「2
& 9」で「アンド」という表記を使うことにな
りました。

そこにちょっとしたギミックとしてですが、
先ほどの奈良の工場で伺った話で、表参道ヒ
ルズにあった当社の「粋更」に、その工場の
商品を置いていたのをみて、すごく感動し
たというのです。「他社の商品も作っておられ
るから、たくさん東京にあるのではないです
か?」と言ったら、「他社は規模が大きく、同
じデザインのものを何工場もつくっているか
ら、これをうちが作ったと言えるかどうかわ
からない。だから、東京の街中で自分の商品
が並んでいるという実感はここが初めてだ。」
とおっしゃったことを思い出しました。「2 &
9」では、そういう奈良の工場の誇りになる
ものを残したいと思いました。エルメスの商
品は同じ商品でも、見えないところにそれを
作った職人さんのマークが入っているのです。
分解すると中にピッと押してある。それは、
製造責任ということもありますが、職人さん
たちの誇りなのです。僕たちはその方式を取
り入れて、全商品のタグの右下の方に動物の
マークをつけています。動物が何かというと、

今お付き合いをしている7工場の社長さんの
干支です。

というのが「2 & 9」というブランドの説
明です。この説明がなければ、奈良の会社が
やっている、単なる靴下ブランドです。でも
これは、最初の「靴下、なんかいいのないよ
ね」というちょっとした思いつきから始まり、
だんだん粒がそろって来て、ちゃんとストー
リーとして、大義として、それを伝えるため
の細かいギミックが整ったわけです。粒と粒
がつながって話として伝えられる。これが筋
のいい組み立てなのです。

—「いい組み立て」にするコツはありますか?

「奈良が靴下のシェア50%以上だ」「靴下
は機能性だ」という粒が三つくらい並んでい
ても、組み立てにはなりません。粒をたくさ
ん出してそこにつながりを見つけて、ストー
リーに乗せていきます。もちろん落ちる粒も
あります。一個の粒としては結構光ってい
ても、ストーリーに乗らないものは入れません。
光っている粒をベースにつなぎたいですが、
一個の光っている大きな粒より、小さな四つ
の粒をつなげるほうが、ストーリーになるの
で伝わります。記憶に残り、共感できるかど
うか。僕たちは商品の前に、そのブランド

の組み立てありきなのです。奈良の靴下シェ
アが50%越えているから靴下買ってよ、とい
う話にはなりません。でも下請けの話や、誇
りの話などのストーリーを聞くと、少し共感
が生まれるわけです。

■共感する時代

—共感するお客さん側に意識の変化はあるの
でしょうか?

戦後間もなく、商品のクオリティ自体がバ
ラバラだったので百貨店の紙袋に代表される
ような「安心」みたいなことがまず強い購買
動機だったと思います。ある程度ものが豊か
になってクオリティがそろってきからは、
スーパーブランドとかカリスマ店員みたいな、
「憧れ」の時代になって、今はそれが過ぎて、
ものがあふれてそんな憧れもなく、身の丈に
あったものを選ぶようになってきている。今
は何で購買動機が決まっているかというと、
「共感」だと思います。「2 & 9」の話はもの
自体の話だけではなく、背景にあるものの話
です。今までは、全然関係なかったそのよう
なことが消費動機になる訳で、そのものだけ
ではなくて、その背景とか、考え方というこ
とに対して、共感する時代なのだと思います。
商品がブランドイメージの中で10のうち4だ



「2 & 9」の商品、ロゴ、干支のマーク

というのは、今の時代だから4なのだと思います。一昔前は8とか9、もしかしたら10だったかもしれません。そういう目で見ると、お客さんの意識は安心・憧れ・共感というふうに流れてきていると思います。

■人と人をつなぐ

一今後の更なるビジョンについて、お聞かせください。

いま熱いのは、お土産ものだと思っています。食品などは「地産地消」と当たり前に行われていますが、お土産ものに関しては、どこに行っても同じキャラクターものや、中国生産の工艺品、箱もののお菓子が並んでいる。だから工芸が売れなくなっているのです。奈良のお土産もの屋さんでも、奈良産の工芸を置いているところはほとんどありません。

お土産の由来は諸説がありますが、神宮（伊勢神宮）にお参りに行ってそこで地元のものを買って帰ってくることといわれています。当時庶民はお金を出しあって代表者を送っていましたから、参詣した証しとして伊勢の地元のものでなければならなかったのです。でも今は、お土産もの屋さんに地元のものがないでいます。

一方で、日本全国にいろいろな小規模な工

芸をしている人がたくさんいます。観光地のそばには絶対そういう人たちがいるのですが、仕事がなく困っています。工芸のメーカーは7名以下くらいの小規模かそれ以上の中規模しかないのです。当社が普段お付き合いしているのは、全国で展開をするためにある程度の生産量が必要なため、中規模が多いのです。そのため小規模の人たちとお付き合いができていませんでした。僕たちが「日本の工芸を元気にする！」と言ってきた中で、小規模には手が届いていなかったのです。

お土産もの問題意識と小規模工芸の問題をつなげて、小さな需要と供給をつくる。量は少ないけれど地元のお土産もの屋さんだったら、2〜3店舗でもいいのでそこだけで売れば、回るだろうと思います。昔は何もしなくても売っていたものが売れなくなっているのです。お土産もの屋さんでも地元のそこにしかないものがあると売りやすくなるし、小規模工芸の人たちも仕事があるとそれで潤うはずです。ただ、地理的に近いこの二人は、放っておくと出会わないのです。そこで当社が間に立ち、小規模工芸側には商品企画とデザインを提供して在庫リスクを当社が請け負い、お土産もの屋さんにはそこにしかない限定のものを供給する。その結果、小規模工芸の人

たちが元気になって、僕たちのビジョンにしっかりつながるのです。小規模には小規模、中規模には中規模、大規模には大規模のやり方があります。手仕事の地域コミュニティみたいなものに、どんどん小さい方向に向くのではなく、それぞれのコンディション、バックボーンにあわせて回っていく永続モデルを作ることができればいいと思っています。

最近、「日本の土産ものをよくする」「小規模工芸を元気にする」という「日本市プロジェクト」を始めました。まだこれからですが、これが一番熱いのです。2013年10月に奈良の三条通にお土産もの屋さんをオープンしました。純然たるお土産屋さんとしてやるのは初めてですが、お土産もの屋さんのありがた、春日大社の参道であることを考え抜いたかたちになっています。一方で、9月には太宰府天満宮のお土産屋さんのリニューアルを手伝いました。短期間でしたので商品は既存のものですが、非常にうまくいっています。これからは地元の工芸の人たちとのものづくりも進めていきたいと考えています。

聞き手 谷垣浩一／日建スペースデザイン
間瀬一博／安井建築設計事務所
黒柳 亮／竹中工務店
と き 2013年11月15日
ところ 株式会社中川政七商店本社



「日本市プロジェクト」奈良の三条通りの土産物店舗

編集後記

インテリア・住宅系分科会

プチ・フュージョンそれはめざしたいスタン
ス。外国語大学卒業、航空会社を経て建築・
インテリアを学んだ私のことだ。建築系翻訳
書の出版も楽しい。ホスピタリティ系もワザ
の1つ。理想の居場所は空間デザインにそれ
らが交錯するニッチゾーン。女子大は案外そ
の1つかもしれない。

だが待てよ、本来のフュージョンは強い個と
個のパワーのぶつかり合い。対峙・激突から
融合へと進化、そして新たなバリューを生
む。果たして私に「強い個」は存在するのだ
ろうか。ハードルは高いのだ。
しかし、生まれたバリューには希少性がある。
何よりチャレンジャーの数だけニッチはある
はずだ。そう思うと誰もが明るくなれる。

(塚口眞佐子)

これまでの歴史を考えると、人がいる限り建
築は無くなりません。そして、そのカタチ
がつくられる動機はさまざまなものです。明
治時代の初期、当時の大工たちは海外から新
しくやってきた様式を見よう見まねで、擬洋
風建築をつくりました。モダニズム以降の建
築家たちは、装飾を排除し、個人の思想など
をカタチにしました。これらの融合のきっか
けは海外からの影響です。現在では、ダイナ
ミックな海外からの影響はもはや期待できな
いかもかもしれません。ただし、本特集によると、
変化を生み出す動機はあるはずであり、融合
(と分裂も?)を生み出すエネルギーの種を
見逃さないよう注意しなければなりません。

(酒井雅男)

今回原稿を依頼したハナムラさんとお話する
機会があり、ここぞとばかりに沢山のお話を
聞かせて頂きました。その中で強く感じた
のは、何かと何かを融合させるための「つな
ぎ」こそが重要なのだということでした。ハ
ナムラさんの病院でのプロジェクト「霧晴れ
て光きたる春」が物語るように、多くの場合
「つなぎ」とは人の「想い」なのです。建築
やデザインの世界に限らず、様々な分野、そ
して異なる分野においても小さな事から大き
な事まで、「想い」を重ねることこそ今世紀
の「生き方」のような気がします。

(黒柳 亮)

クリエイティブな事業では、共有されるコン
セプトがとても明確であることが読み取れま
した。そのため、ハードの役割は一見限定さ
れるかのように見えますが、異分野との繋が
りとして、実はとてつもなく大きく、無駄な
く目的に合ったものを提案できるかという点
がポイントではないかと思います。今後の設
計に活かせるキーワードを数多く頂きました。

(間瀬一博)

今回の企画を通して、建築には人々を惹きつ
けてやまない様々なフュージョンが不可欠だ
と強く感じました。

私が好きなフュージョン空間を思い浮かべた
時、はじめての勤務地である神戸の街が浮か
びます。北は六甲山がそびえ、南は大阪湾
が広がり、自然と異国文化と建築が見事に
フュージョンしており、訪れるたびに異国情
緒や海への眺望で癒され、また、若かりし日
の思い出に浸ったりしております。

今回の分科会で色々とフュージョンさせてい
ただいた企画委員の方々には、深く御礼申し
あげます。

午年だけに、みなさまにとって馬が合うこと
が多い1年でありますように。

(森岡拓也)

私が融合と聞いて思いつくのは、相互関係を
うまく活用し相乗効果を生む「保育園・幼稚
園」と「老人ホーム」の異世代融合です。し
かし、今回の各論では、新しいものと古いも
のとの融合、希望を与える融合など様々な角
度からの融合を執筆していただき、色々な形
になるものだと感じさせて頂きました。今後
も思いもよらぬ融合にて新たな一面が生まれ
てくる、そんな建築に期待してまいります。

(川合隆之)

広辞苑にはフュージョンは「融合」例えば音
楽では「ジャンルの異なる音楽を融合した
ものなど」とあり、「融合」とは「とけて1
つになること」、「とかして1つになること」
とある。手元にあるWebster's Vest Pocket
Dictionaryにはfusionは「process of merging by
melting」と書かれている。たぶん今大切な
のは、空間そのもののとらえ方・考え方や空間
で生じる現象から受ける刺激等が今までの枠
を超えて多面的にとけ合うことができる事に
気づくことであり、そこで生み出される成果
がこれからの私達の建築環境に対する刺激と
なり、次への進む糧になりそうな気がする。

(ペリー史子)

技術が進歩し文化が成熟すると、自ずと専門
性を高めるために細分化していく。その高度
化の代償として、本来は一つのものであった
もののたちの関係性が希薄していくように思え
る。それが極限まで達すると、閉塞感や行き
詰まりを生み、開放への衝動へと変化してい
き、各々で高度化、成熟していたもの同士が
新たな関係を築き、融合していくように思え
てならない。今回の特集の事例は、建築・デ
ザインのジャンルでは特異な例かもしれない
が、確実に人びとに共感を得た成功事例であ
り、建築やデザインのさらなる発展への可能
性を予感させるものである。

(谷垣浩一)

天井脱落対策を推進

前田 亮

国土交通省住宅局建築指導課企画専門官

背景

国土交通省では、平成13年の芸予地震、15年の十勝沖地震および17年の宮城県沖地震など数次の地震で、体育館や空港ターミナルビル、スポーツ施設など大空間建築物の天井脱落の被害が生じたことから、振れ止めの設置、クリアランスの確保などについて技術的助言を発出するなど、大規模空間を持つ建築物の天井の脱落対策を進めてきた。

しかしながら、平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、体育館、劇場、商業施設、工場など大規模空間を有する建築物の天井は、比較的新しい建築物も含め脱落する被害が多く見られた。被害件数は（社）日本建設業連合会からの報告によると、約2,000件にも上った。

これらの被害を踏まえ、国土交通省は、平成23年度から24年度にかけて、天井脱落対策の技術的な検討を行うとともにパブリックコメントを実施した。それらを踏まえ、天井の脱落対策に係る技術基準をまとめ、平成25年7月12日に建築基準法施行令および施行規則を8月5日に関連告示を公布した。平成26年4月1日に施行する。

概要

■天井脱落対策に関する技術基準

(1) 天井脱落対策の全体像

今回、建築基準法施行令第39条等を改正し、脱落によって重大な危害を生ずるおそれがあるものとして国土交通大臣が定める特定天井には、構造耐力上安全なものとして、国土交通大臣が定めた構造方法を用いるもの、または、認定を受けたものであることを義務付けることとした。

特に腐食、腐朽その他劣化のおそれがあるものについては、その防止措置を講ずることとしている。

国土交通大臣が定める特定天井としては、次のいずれにも該当する吊り天井と定めている。

①居室、廊下、その他の人が日常立ち入る場

所に設けられるもの

②高さ6mを超える天井の部分で、水平投影面積が200㎡を超えるものを含むもの

③天井の単位面積質量が2kgを超えるもの

なお、大地震に対して天井が脱落しないことを直接確認することは、現在の技術的知見では困難であることから、部材に一定の余裕を持たせた上で中地震時に天井が損傷しないことを確かめることで、中地震を超える一定の地震においても脱落の低減を図ることとしている。

特定天井以外の天井については、基準による規制の対象ではないため、設計者の判断により地震その他の震動および衝撃に対して安全を確保することとなる。

(2) 天井脱落対策の検証ルート

特定天井の脱落対策については、水平方向の地震力に対し斜め部材などを配置し、天井が周囲の壁などに衝突しないようクリアランスを確保することを基本として、以下の①～③のいずれかのルートを適用し検証することとしている。

なお、各ルートによる天井の脱落対策に関する検証は、構造躯体の計算ルートによらず、いずれの計算ルートでも検証可能となるように位置付けている。

①仕様ルート

一定量の斜め部材の設置、クリアランスの確保、接合部の緊結など一定の仕様に適合することで、天井の耐震性等を検証する。質量は平米2kgを超え20kg以下を対象としている。

②計算ルート

水平震度法、簡易スペクトル法、応答スペクトル法等の計算により天井の耐震性等を検証する。天井に生ずる地震力の算定を精緻に行うことで構造方法の合理化が可能となる。

③大臣認定ルート

大臣認定ルートとしては、a. 構造躯体の特性を時刻歴応答解析で検証する建築物について、天井の耐震性等を検証するものと、b. 形状が複雑な天井など仕様ルート及び計算ルートに適合しない天井の耐震性等を実験及び数値計算で検証するものがある。

後者（b.）については、個別の天井の認定のほか、一定の適用範囲を定めてその範囲内で使える天井の認定も可能である。

なお、今後、クリアランスを設けない構造方法でも安全であることの技術的知見が得られるなど、汎用性の高い設計法が開発された場合には仕様ルートや計算ルートを追加し、告示へ位置付けることを検討することとしている。

■既存建築物への対応

既存建築物の天井脱落対策については、以

下の施策を講ずることを予定している。

①特に早急に改善すべき建築物の対策

防災拠点や多数の人が利用する建築物で避難に時間を要するものなど、特に早急に改善すべき建築物については、特定行政庁において、天井の脱落対策の改修を行うことを行政指導する。

②定期報告制度などの活用による状況把握

建築基準法第12条第1項に基づく定期報告制度および同条第2項に基づく定期点検制度について、対象となる天井を基準の適用対象となるものとするなどの見直しを行い、状況把握を行う。

③天井脱落対策のための改修への支援

既存建築物の天井脱落対策のための改修費用については、社会資本整備総合交付金、防災・安全交付金の活用による改修支援を図る。

なお、平成24年度までは構造躯体の耐震改修とあわせて天井の耐震改修を行う場合について交付対象としていたが、平成25年度当初予算において、構造躯体が耐震性を有する場合の天井のみの耐震改修を交付対象に追加している。

技術基準を具体的に解説

平成25年10月に、国土技術政策総合研究所、（独）建築研究所および（一社）新・建築士制度普及協会において、設計および審査の実務者の技術的支援を目的とした「建築物における天井脱落対策に係る技術基準の解説」が取りまとめられた。

天井材として用いられる接合金具などに係る試験方法、緊結などの仕様基準に適合する接合方法などの具体的設計仕様、計算ルートによる場合の具体的計算例や留意点、確認申請図書の審査内容などについて技術的な情報を整理したものである。

この解説については、（一社）建築性能基準推進協会のホームページで公表されている。

(<http://www.seinokyo.jp/tenjou/top/>)

また、各地域の建築関係団体において講習会が順次開催されている。

おわりに

天井の脱落対策に係る基準の円滑な施行と既存建築物の天井の改修などの促進に向けて関係各位の取組とご協力をお願いしたい。

（まえた りょう）

●前田 亮

昭和46年生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。平成7年建設省（現 国土交通省）入省

建築物の省エネ基準の改正

丹羽勝巳

(株)日建設 設備設計部門 設備設計部長

33年ぶり大改定/新省エネ基準

昭和54（1979）年制定の省エネ法に関連し、昭和55（1980）年に初めて制定された「建築主等の判断の基準（省エネ基準）」は、平成5（1993）年に強化、更に平成11（1999）年に再強化されている。今回、平成25（2013）年基準として、従前のエネルギー消費係数（CEC）に代わり、「一次エネルギー消費量に関する基準」が新たな判断基準として設けられるなど大改定が行われた。（表-1、図-1）

本稿では、「建築物（＝非住宅建築物）」の省エネルギー基準改正に限定した記述であり、「住宅」に関しては国土交通省ホームページなどを参照されたい。

新省エネ基準の見直し概要

1）建築物と住宅の省エネ基準を一本化

住宅と建築物の省エネ基準について、国際的にも使われている一次エネルギー消費量を指標として、同一の考え方により、外皮性能に加え、設備性能を含め総合的に評価できる基準に一本化。これまで建築設備を設備毎に評価していた、設備システムエネルギー消費係数（CEC）は廃止されている。

表-1 非住宅の改正省エネ基準の全体像

指標の見直し	外皮 設備	改正前 (平成11年基準)	改正後 (平成25年基準)
		PAL	PAL*
5,000㎡以下の簡易評価法の見直し	外皮	ポイント法(外皮) 簡易なポイント法(外皮) 注2)	モデル建物法(PAL*)
	設備	ポイント法(設備) 簡易なポイント法(設備) 注2)	モデル建物法(一次エネルギー消費量)

注1)【通常計算法/主要室入力法】
注2) 2,000㎡以下に限る

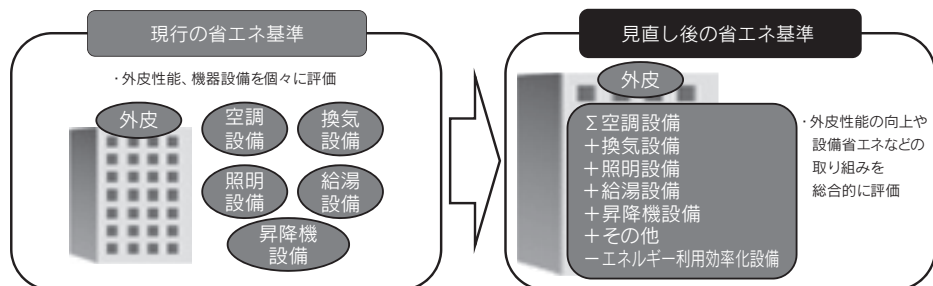


図-1 省エネ基準改定のイメージ(建築物)

2）建物用途ごとの基準を室用途別の基準に

建物用途ごとに設定されていた基準を室用途や床面積に応じて評価できるよう計算方法が設定された。従前は、地域ごと・建物用途ごとに判断基準値が与えられていたが、新基準では建物を構成する室の用途（210用途）に応じて単位床面積あたりの基準一次エネルギー消費量が地域別に規定された。

3）売電に対応したエネルギー利用効率化設備による発電量評価のルール化

建築物におけるエネルギーの効率的利用に資する取り組みを評価する観点から、エネルギー利用効率化設備（太陽光発電等）による発電量については、売電を行わない場合に限って一次エネルギー消費量から差し引く。

4）外皮性能は平成11年基準レベルを満たすことを原則とする。

新たな外皮基準PAL*

従前の外皮基準の指標であるPALは、新しい外皮基準の指標PAL*（読み方：パルスター）として告示改正され、平成26年4月1日から施行されるので注意が必要である。

PAL*は、現行PALの考え方を踏襲しつつ、計算条件等を一次エネルギー消費量計算の条件と統一するように定義されている。

- ・地域区分を現行PALの12から8とした。
- ・建材の物性値は住宅と非住宅でも統一。
- ・室使用条件（空調時間、内部発熱、換気量等）を現行PALの条件から変更。
- ・外気負荷及び内部発熱について潜熱も考慮
- ・ペリメーター面積の算出方法を簡略化、規模補正係数を廃止

新省エネ基準のメリット

各設備の建築全体に占めるエネルギー消費割合は、建物用途によって大きく異なっている。新省エネ基準が一次エネルギー基準となることで、エネルギー消費量が多い設備に対して重点的に省エネに取り組むなど、建物毎のエネルギー利用特性に応じた省エネを推進することが可能となる。設備別の一次エネルギー消費割合（例）からは、例えば病院用途では、給湯・空調の順に重点的に省エネを図ると効果が大きく、事務用途では空調・照

明の順で対策を講じるべきであるなど、建物用途毎に重点ポイントが異なるなどの傾向が一目瞭然である。（図-2）

このことは、省エネ計算書が単なる届出用資料に留まらず、省エネ設計のための検討ツールや客観的な建物の省エネルギー性能評価ツールとしても活用される可能性を示しており、今後はその活用が期待される。

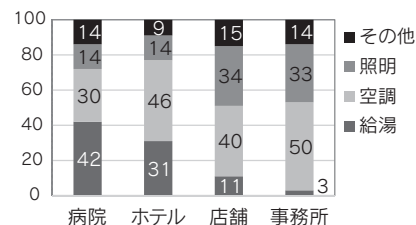


図-2 建物用途毎の各設備のエネルギー消費割合

計算プログラム2種が整備

現時点では、独立行政法人建築研究所から「一次エネルギー消費量算定プログラム（建築物用）」（WEBツール）が、一般財団法人建築環境・省エネルギー機構から「BEST改正省エネ基準対応ツール」の2種類が計算ツールとして提供されている。（表-2）

表-2 WEBツールとBESTツールの比較

	WEB（無償）	BEST（有償）
計算	日負荷計算法 1日間隔 365 steps/年 定常計算	時刻別計算 5分間隔 105120 steps/年 非定常計算
交互作用	—	建築と設備、設備間の連成計算 有
気象 data	代表8地点	842地点
基準値	室用途別基準値 (標準の室・設備モデルに基づく固定値)	ベースラインビル (設計建物を基準仕様で置換して算出)

今年4月から新基準は完全施行、新基準の習熟が急務

新省エネ基準は、平成25年4月1日から施行されている。改正前の基準を用いることができた経過措置期間は間もなく終了し、平成26年4月1日から完全施行となる。建築主・設備設計者によっては新基準への取り組み状況について大きく差があるように思われる。新基準に基づく届出事例や各種プログラムを用いた入力事例や一次エネルギー消費量の試算結果の情報も不足しており、関係者は試行錯誤の模索状態と思われる。未習熟な現段階では作業時間が従前の2倍以上となるなどの報告例もあり、急ピッチで新基準への対応・習熟が求められている。（にわ かつみ）

●丹羽勝巳

1989年3月（株）日建設入社。2013年1月 大阪勤務。技術士（衛生工学部門）、エネルギー管理士、設備設計一級建築士。建築物新省エネ基準検討委員会（JSBC）委員。

所在地／奈良市三条本町
 設計／大阪鉄道管理局工務課（柴田四郎、増田誠一）
 施工／大林組
 竣工／第一期工事 昭和9年、第二期工事 昭和33年
 構造／鉄骨鉄筋コンクリート構造 中央部木造小屋組
 規模／一部地階を有する2階建 建築面積 約870㎡
 移築後は平屋建 建築面積 約490㎡
 種別／駅舎

■踏みとどまった旧駅舎

近年、JR奈良駅は路線の高架化による橋上駅となり、駅前景観も大きく変わった。

振り返ると、「奈良シルクロード博」が開かれた昭和63年（1988）、京阪奈を結ぶ鉄道幹線として、関西線は利便性向上が図られ大和路線のネーミングとともに奈良駅の活性化が標榜されたようである。折しも奈良市は市制100周年を迎えたことを契機に駅西口側の整備を進め、当時市内における最高高さを謳ったホテル、つづいて市民ホール「なら100年会館」などの建設がつづいた。

そうした時期の平成10年にJR路線及び駅舎の高架化計画が公表され、駅舎の存続が危ぶまれた。それから間もなく市民そして建築家有志の活動により奈良駅の建替問題が浮上し、日本建築学会による奈良駅舎の評価と保存の要望もなされた。そうしたことで駅舎建築の歴史的価値が再認識されることとなり、平成13年奈良市によって移築保存と活用の方針が示され、計画着手されている。駅機能は平成15年に新設の仮駅舎へと移り、本駅は翼部を除去された中央本屋部分が東へ曳き屋移築され旧駅舎として再生が待たれた。平成20年に至り奈良市建設部営繕課の設計（民間事務所に委託）により補強再生工事が行われ、平成21年夏竣工し、奈良市総合観光案内所として活用されている。長大な橋上の奈良駅は平成22年に竣工、平成24年には階下に大型商業施設もオープンするなど駅前は見違えるものとなった。そのなかで方形の瓦屋根をもつ旧駅舎と三条通りに導くように駅前広場に建つ2基の常夜燈が歴史を伝えるものとなっている。

■2代目駅舎の建築

奈良と結ぶ鉄道は明治23年、大阪鉄道株式会社に奈良～王子間に路線を開いたことに始まり、明治25年に大阪（湊町）～奈良間が開通している。その後、関西鉄道を経て明治40年に国有化されている。その当時より古都遊覧が流行し、明治27年に奈良博物館、そして明治42年には鉄道院による奈良ホテルが開業している。昭和時代を迎え、観光都市奈良は全国より旅客を迎えて発展するに至り、大阪鉄道管理局は奈良駅舎改築計画に着手。昭和8年に設計され駅舎中央本屋部を1期工事として昭和9年1月に着工され、昭和9年7月に寺院の瓦屋根を想起させる「和風を加味せる近世式」というコンクリート造の駅舎が完成した。

竣工に際し、地元紙『大和日報』（7月21日）では1面全紙を当てて新駅竣工を報じ、設計者の建築技師柴田四郎、工事掛増田誠一による「改築に際して―古典美発揮に努む―日本趣味豊かな近世式の建築」を載せている。

設計の要点が詳述されており、ここに一部を引いて紹介する。

「古都奈良市の表玄関として単なる在来の所謂洋風建築を避けたい……、しかし私は大都市のシティーゲイトは絶対に耐震耐火構造でなければならないと考えております。そうすると建築界近頃流行の日本趣味を加味したる近世式建築になって来ます。……国有鉄道の駅本屋である性質上元より華美なものは許されません。余裕のない予算の内である事ですから優麗典雅は望むべくもありません。近頃数多く出来た同じ目標の建築の亜流にいた



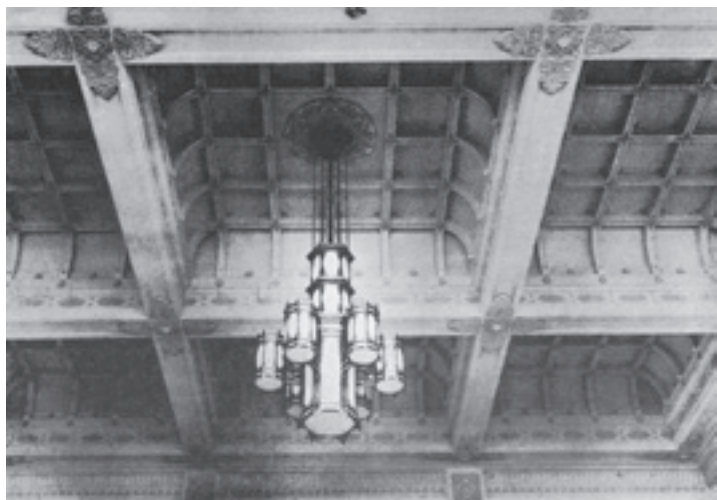
①JR旧奈良駅舎全景。春日社の参詣道である三条通り交差点より見る。手前の常夜燈は江戸時代末に、この付近に設置されたものと言われている。平成25年12月筆者撮影



②



③



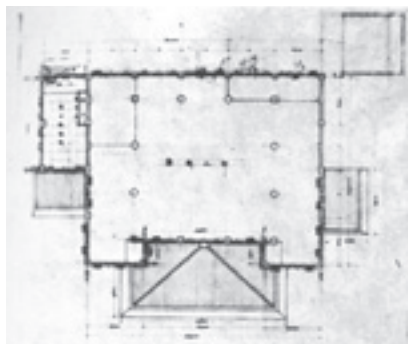
④



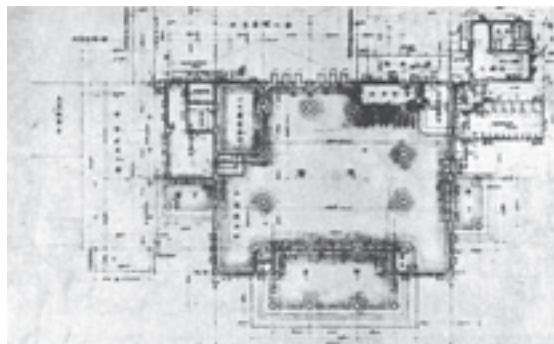
⑤



⑥



⑦



- ②奈良駅本屋外観 第1期
- ③奈良駅本屋 広間屋根棟飾
相輪上部飾りは転法輪を模したもの。
- ④駅本屋 広間天井
- ⑤駅本屋 広間及1、2等待合室
- ⑥関西線奈良駅本屋透視図 第2期完成時
- ⑦本屋2階平面図、本屋1階平面図



⑧移築前の本屋 北面



⑨移築前の本屋 西面プラットフォーム側



⑩移築前の本屋 広間



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮

⑪JR旧奈良駅舎 東側正面

⑫玄関 2基の春日灯籠型ブラケット
灯具は当初のもの。

⑬広間内部 コーナに観光案内所カ
ウンター、そして中央吹抜部に大極
殿正殿の柱及び組物（原寸復原）が
設置されている。

⑭広間回りは宮殿回廊風のギャラリー
に整備されている。

⑮修復された柱頭飾り、梁型及び小壁
面の宝相華文様、花卉形装飾。

ずらに墮せず、何等かの新味を少しでも出そうとした處に苦心があります。」

そこで古都のシンボルである塔の方形屋根に注目し「其の感激のみを写して勾配を工夫し、軒裏を近代化しました」としている。「瓦は本焼スパニッシュ、これは在来瓦葺の曲線の優美感を害せずしかも雨仕舞の欠点を改善したものです。……色は青の派手さを逃げ黒色との中間を行ったヴィリジアンを撰びました。屋根頂には塔屋の九輪を本来の風切、棟飾りの意味に使用して避雷針を兼ねることにしました。水煙の代わりにはスピードの象徴である転法輪を模した鋳物を取り付けました。云はば鉄道の標識です」と屋根の造形には拘りを見せた。

駅舎は路線に従って配置されたため、やや南に触れた東側を正面とし、駅前広場の北は春日大社参詣道に当たる三条通りに通じていた。正面入口には特色ある柱頭を有する四本の列柱を建て、深い庇をもつ車寄せポーチを付設している。広間（ホール）は約16メートル四方で2層吹き抜けとされ、高窓からの採光と立派な和風意匠のシャンデリアの下がる格天井により、和洋がミックスされた特異な空間であったようだ。写真資料にみるプラットホームに通じる改札口、広間西南隅に置かれた1、2等待合室、その脇の駅案内所の風情など興味深いものがある。そして当初より南北に延びる2期の増築が計画されており、両翼部に通じる出入口が開かれていた。

外観においては軸掛けスクラッチタイルの壁面、縦長スリット状の窓、クラシカルなレリーフ装飾、そしてアール・デコの装飾も散見されるなど、ライト式のモダンな洋風を基調とし、設計者の言葉通り、奈良の伝統とした和風を導入したコンクリート造の近代建築として独自のものであった。

昭和33年に至り、未着工であった北側翼部3スパンと、南側翼部のうち1スパンが増築され、ランチルーム及び洗面所設備などが付設され、外観においてファサードの広がりと左右にコロネード状の瓦葺庇屋根が加えられた。第1期工事から24年にして当初の増築計画規模には至らなかったが、設計者が密かに求めたという優麗さを添えるものとなったのである。

平成21年に完工した曳き屋部分の再生工事は旧駅舎主屋部の外観と2層吹き抜け空間に限られたため立体的な箱型を呈しているが、寄棟瓦屋根（瓦は昭和39年に当初のスパニッシュ瓦から葺き替えられていた）と、大きな前庇によって寺院風のシンボル性は留められている。そして西側正面壁の鋼板フレームによる補強工事、保存部分ではレリーフ装飾な

ど入念に修復されている一方、屋内には鮮やかな丹塗りの大極殿正殿一部軸組の原寸モデルが展示されるなど一変した感もあるが、再生された旧駅舎の活用例として注目してゆきたい。

■コンクリート造の近代和風

近代におけるこうした和洋折衷の表現を用いた建築は明治初期の擬洋風建築に始まるが、とりわけ古都奈良においては奈良県物産陳列所（奈良県技師関野貞設計、現、奈良博物館 仏教美術センター、明治35年）、奈良ホテル（辰野金吾・片岡安設計、明治42年）など和風様式をとる近代建築を建て、古都の景観を特色づけるものとして保持されている。

昭和初期に入ると、従来の木造による和洋折衷に加えて、コンクリート造の近代建築に瓦屋根や和風意匠を付した建築が伝統的色彩の濃い建築様式（帝冠様式と呼ばれることもある）が現れる。なかでも設計競技入選作として建った名古屋市庁舎（昭和8年）、大礼記念京都美術館（現、京都市美術館、昭和8年）、後年の東京皇室博物館（現、東京国立博物館、昭和12年）など話題となったものである。加えて昭和5年に鉄道省の外局に設置された国際観光課が先導し進められた観光推進事業に関連し、外国人観光客の誘致を目的の一つとして建てられたとされる、聴泉閣（大林組、昭和7年）、琵琶湖ホテル（岡田信一郎設計、昭和9年）、蒲郡ホテル（久野節設計、昭和9年）などの観光ホテルなどが加わり、和風を採る多様な近代建築が建てられている。

改めて奈良の建築に目を転じると、奈良駅舎に前後する時期に、和風意匠を採る近代建築が種々建てられていることに気づく。先ず昭和5年、興福寺南円堂に隣接する所に和風造りのキリスト教会堂で知られる日本聖公会奈良基督教会が建てられている。設計者の大木吉太郎は奈良の近代建築そして社寺の修理など幅広く活躍した建築家であり、古寺との調和を図るものとして入母屋造の教会堂を試みたのであろう。瓦屋根の近代建築では橿原市の畝傍高等学校（旧制畝傍中学校、昭和8年）がある。奈良県土木営繕課の設計によるもので、鉄筋コンクリート造3階建ての長大な南北両館をもつ学校建築である。北館の中央に玄関を置き上部は方形瓦葺屋根で相輪飾りをもつ塔状にデザインされている。方形屋根の形態、そして縦長窓の外壁構成など奈良駅舎と共通する意匠が認められる。また腰壁擬石タイル、アールデコの意匠なども同時代風の意匠と言える。設計を担当した岩崎平太郎は古社寺修復でも活躍していた建築技師で、本建築は氏の県営繕課時代の代表作品とされ



⑯奈良県立畝傍高等学校 北館北面 昭和8年

ている。また駅舎建築では橿原神宮の参拝者駅として整備されたJR線畝傍御陵前駅（昭和14年）、近鉄線橿原神宮前駅（村野藤吾設計、昭和15年）があり、共に大和棟の大きな切り妻屋根を特色としている。とりわけ後者は両翼に瓦屋根の列柱廊を伸ばし、和の近代的表現を試みた村野建築としても著名であり（本誌「再読関西近代建築14」に収録）神宮を擁する橿原市の歴史的イメージを形成している。

こうして見ると、近代における奈良の建築には、古都の景観との調和を積極的に図ろうとした近代建築の一群のあることに気付く。そしてこうした建築家は個人的にあるいは奈良県技師として古社寺の調査や修理に関わっていた経歴もあり、和風建築を深く理解していたに相違ない。奈良駅の設計者であった増田は大阪鉄道局技師であったが、この設計に際して自ら奈良の諸寺院、平等院など訪ね歩き、作案したと伝えられている。また相輪などの和風図案には、奈良県技師岸熊吉らの助力もあったと記しており、和風の導入に際して、伝統に対する真摯な思いが傾注されたのであった。

この執筆にあたり、修復整備工事に関しては、奈良市建築部営繕課増田領氏にご教示を頂きました。記して謝意を表します。

参考文献

- ・馬場知巳『駅のうつりかわりー鉄道旅客駅変遷史』昭和63年
- ・奈良県教育委員会『奈良県の近代和風建築』平成23年

（やまがた まさあき／大阪芸術大学建築学科教授）

高砂 正弘

—MASAHIRO TAKASAGO—



「農家のアトリエ」にて

経歴

1956年 大阪府生まれ
 1979年 大阪工業大学建築学科卒業
 1979年 瀧光夫建築・都市設計事務所
 1986年 早稲田大学大学院修士課程修了
 1990年 高砂建築事務所設立
 2004年 梅花女子大学教授
 2009年 大阪人間科学大学教授
 2011年 和歌山大学教授

主な受賞

1994年 大阪建築コンクール奨励賞
 1994年 日本建築士連合会賞奨励賞
 1995年 大阪建築コンクール渡辺節賞
 1996年 日本建築士会連合会賞優秀賞
 2000年 木材活用コンクール優秀賞
 2002年 日本建築家協会JIA新人賞
 2004年 グッドデザイン賞
 2005年 大阪建築コンクール大阪府知事賞

風景に素直な建築

高砂正弘氏の生家を事務所に改修した「農家のアトリエ」に案内された。古い建築のもつ力強さの中に、新しい素材を使って挿入されたアトリエは、中庭を中心に巧みに空間をつなぐ仕掛けがされていた。かつては素材を発酵して味噌をつくっていた「みそ小屋」を、考えを発展または変化させる場所として改修した作業室で話を聞くこととなった。

高砂氏は「建築と緑」をテーマに設計を行っていた瀧光夫氏のもとで建築実務を学んだ。その事務所では、鉄筋コンクリートや鉄骨のフレームとガラスとで、巧みに構成された建築に、自然や緑が織り込まれた「逃げがなく、隠すところがない」づくり方を経験し、現在の高砂氏の建築につながっている。

独立してからは住宅や公共施設、環境デザインなど、その設計の種類は多岐にわたる。茨木市の山間部にある青少年野外活動センターに建てられた「森の展望台・トイレ」はシンプルな幾何学構成で、整ったプロポーションにより存在を明らかにしながら、素材とディテールで森の風景に融け込んでいる。平面も重要であるが、建築は空間をつくっているため、常に立体的に建築を考えていると高砂氏は言う。

住宅の設計では、クライアントの要望を出来るだけ聞くようにしている。話を聞いて、それを上手く建築に取り入れ、さらに展開するのがプロの仕事だと考えている。クライアントは、住みやすさや居心地の良さ、素材の使い方などに共感し、設計を依頼する。そのため要望を丁寧に聞き入れた高砂氏の住宅には、一見するとスタイルがないようにも見えるが、さり気ない個性と表情で、街の風景になじみ、さらに引き立てる素直な建築となっている。いつも風景をより美しくしたいと思いながら、建築をつくっている。

「和」の考え方が好きと高砂氏は言う。建築でも、柱と梁で構造をさらけ出している民家や農家が好きなようである。それは、構造がはっきりと見え、それらに守られているということが住まいの基本という考えによる。力の流れが見えないハリボテの建築にはしたくない。すべての構造が見え、それとは切り離された仕上げに被われた建築が「和」の考え方で、それを素直に表現するのが良いと思っている。しかし、そのように見せるためには、構成やディテールに色々な工夫が必要で、そのスタディには手間ひまを掛けている。

2011年から和歌山大学環境システム学科で教鞭をとっている。大学では集落や古い建物の調査を通して、学生に建築の面白さを伝えている。また、環境という大きな枠組みの中で、「つくるだけが建築ではなく、新しくするだけがいいわけではない」という側面から、建築を見ることが出来るのも面白いと言う。さらに、ミースの研究も継続して行っている。ミースの建築にみられるグリッドシステムや空間構成に関する研究で、それらの調査や分析を、建築の設計に役立たせるのがねらいのである。

人にはどんなかたちであっても必ず「くせ」があると高砂氏は言う。高砂氏の「くせ」が今後どのように発展して変化して行くのか、これからの高砂氏の建築が楽しみである。

聞き手 吉永規夫 (Office for Environment Architecture)
 写真撮影 河合止揚



はじめまして U-35委員会です

U-35委員会とは、日本建築協会における「若手設計者を中心とした協会活性化のための新たな活動プログラム」として、関西を中心に活動する設計組織・ゼネコンの35歳以下の若手設計者たちが集い、2013年4月に設立された組織です。

<活動の目的>

1. 業種・組織を超えた、同世代をつなげるプラットフォームの創出。
2. U-35世代の多角的な視野の獲得。
3. 建築における多様な価値の社会への発信。

<メンバー紹介> 一氏名一所属一ひとこと一

	上野山 貴嗣 (安井建築設計事務所) 「こんなやりたい」を届けたい。」
	榎 恭志郎 (大建設) 「設計者のサロンとなれば。」
	駒井 陽次 (昭和設計) 「同世代の多様な感性が会おう場に。」
	下田 康晴 (東畑建築事務所) 「U-35だからこそできる繋がりから新しい風を。」
	白波瀬 智幸 (竹中工務店) 「がんばっていきましょう。」
	中村 祐記 (大林組) 「U-35世代の飛躍の原点に。」
	西森 史裕 (大林組) 「今までにない輪を一緒に作りましょう。」
	松島 将太 (大建設) 「シ・ゲ・キ・テ・キな出会いが起る場に。」
	横川 彩香 (東畑建築事務所) 「建築界に彩り、潤いと少しの笑いを。」
	若江 直生 (日建設) 「つながり、視野を広げるときかけとなれば。」



U-35委員会企画 1st action
「建築と木材」活動報告
見学会&交流会
2013年11月25日(月) 16:30~

「建築と木材」企画概要

第1部：見学会

U-35委員会メンバーの白波瀬氏と、パネリストの興津氏の設計による、国内初の耐火木造オフィスビル「大阪木材仲買会館」において設計者の解説を交えて見学会を行いました。

第2部：パネルディスカッション+交流会

「建築と木材」をテーマに組織設計・ゼネコンのU-35世代の設計者3名をゲストに迎えて、手がけた建築作品についてプレゼンして頂くと共に、パネルディスカッションを行いました。

交流会の時間もあっという間でしたが、企画後の懇親会も多数のご参加を頂きました。



飲み物片手にカジュアルな雰囲気です。



懇親会にて全員そろって記念撮影。

パネリスト／作品紹介①
興津俊宏氏 (竹中工務店)
「大阪木材仲買会館」



大阪木材仲買協同組合が持つ会館の建替です。都市部において内外部ともに木を五感で感じられる建築を目指しました。

鉄とコンクリートのビルがあふれる街に既存の桜を囲むように生まれた木の温もりを持った耐火木造ビルは、技術革新やエコ・木の情報発信にとどまらず、ビルのワーカーだけでなく都市にも安らぎを与え、これからの都市と人と木の関わり方を示す手掛かりになると考えています。

パネリスト／作品紹介②
久保久志氏 (東畑建築事務所)
「新城市立黄柳川小学校」



「どこか懐かしい木の学び舎」をコンセプトにした小規模な木造2階建ての校舎です。周辺の山並み・家並みに合わせた切妻屋根、深く張り出した軒、地域の杉材で設えた下見張りの外壁が地域の風景になじんでいます。木を現しにした内部空間は、森の中にいるようなぬくもりを与え、質素でない簡素なたたずまいに活き活きた子どもたちの活動を映します。使用した木材は杉・桧併せて約800㎡、新城市産材は内90%にものぼりました。

パネリスト／作品紹介③
静茂夫氏 (大建設)
「勝浦町立勝浦中学校」



外壁には、工場一体加工とした県産焼杉パネル工法とし、高い耐久性・安全性・施工性を確保。内装については、県産杉板型枠コンクリート打放し仕上とともに、勝浦川の水の流れをモチーフにした木板デザインを展開させ、木目の暖かさ・川のせせらぎ感を創出。デザイン壁・天井は吸音効果も期待できる。さらに天井材の一部は、杉板型枠として利用した廃材を、洗浄・ケレン・再塗装を施し、内装材として再利用している。(再利用率約30%)



パネルディスカッション（抜粋）

コーディネーター：上野山貴嗣

■木材利用が向いているケースとは？

興津 木材会館の場合は、木材の利用が前提条件でした。木材業界の活性化のため、色々な使い方を提示しながら、社会的な意味を込めて利用しました。

久保 学校施設では小規模校も多くなっているので、ぜひ木造でやるべきだと思います。僕自身は木造が初めてで、知らないことが多く全てがチャレンジ。設計者がもっと木造のことを理解しなくてはと感じました。住宅設計をされている方は木造に詳しいと思いますが、中・大規模施設の設計者はほとんど知識がないのが現状だと感じます。しっかり勉強した上で、子どもが使う学校施設などは木肌を見せて暖かい空間を作ってあげたいと思います。

静 用途が学校だと内装制限がかからないので木材を使いやすい、施主が杉山を持っていたらそれを活用する、木材会館だったら業界の活性のために、等、背景に左右されると思います。社会的背景に対して、先ほどの黄柳川小のようにRC造を求められたところに木造を提案したり、また我々設計者が勉強する等、色々なハードルをエネルギーに乗り越えていく熱い想いを持てるかというところにかかっている気もします。

久保 都市部では耐火要件などクリアすべきハードルが大きいので、無理し過ぎない程度に木材利用に取り組んでいくのも一つだと思います…べつに、耐火建築物の燃エンウッドが悪いとかそういう話では決めています(笑) 学校の3階建の実大実験等もされていますが3階建の木造校舎が本当に必要かという議論もあると思うし、勝浦中のように、内装木質化

であんなに素晴らしい空間が出来るなら、そういう使い方もあると思います。ただ、構造体として木材を使うと、かなりのボリュームが使えるのは事実です。

■木材って高いの？

興津 耐火集成材はそれなりに高いですが、その中で、いかにコストを下げるかという努力ですね。仕口が複雑になるとコストが高くなるので、木材会館の場合は、L型に架構を組むことで、柱の仕口部分を減らしたり、床のRCとの剛性を配慮することで梁せいを抑えて部材断面を小さくする、等でコストを削減しています。仕上では不燃化すると手間・コストがかかるので、避難安全検証法を用いて内装制限を外し、極力不燃化せずに木材を使っています。また、今回の木材利用に対する国の補助金を活用しています。というわけで、ただ高いものを作ってるだけではなく、努力していますという言い訳です(笑)。

静 勝浦中でも補助金を利用し、木質の内装材とそれを支える下地材、木造としたクラブハウスは基礎や設備機器も含めて補助対象となり、木工事金額の1/2が補助されました。補助制度を使うのは一つのノウハウだと思います。勝浦中の建設時は国からの補助額が県全体で2～3億円でしたが、今年は7,000万円程度しか付いていません。年度ごとで額が変わるので、その情報を的確につかむことが重要だと思います。

久保 黄柳川小の場合は、製材だと地元材では全ての量がまかなえないことが分かったので森林組合等関係者と話し合っ、コストやスケジュールを含めて集成材を選びました。躯体も準耐火とすることでコストが約1.3倍になってしまったことが分かりました。木造校

舎部分の工事費の約4割が木構造工事だったので、それが1.3倍になると、影響は大きいんです。

また、金物を一から設計するような構法をとるのか、メーカーの認定構法で設計するのかで、金物の値段が全く違うんです。

それを設計者が知らないケースが多い。RCとコスト比較した時にも、その辺の話が分かったので、費用対効果を含めた適切な判断が出来たと思います。

■グレーゾーンあるある。

興津 グレーゾーンではなくてちゃんと合法ですが、外装に木を使うことで少し考えました。外壁に木材を使うと耐火性能が必要となってしまいます。そこで、西・南面は全て耐火性能を求められない木製の建具で構成しました。ただ、延焼ラインにかかると防火設備が必要となりますので、西側のRCの袖壁を出すことで延焼の回り込みをとって一番北側の建具でも延焼ラインにかからないようにしました。そんなにグレーではないんですけどね、合法ですけど(笑)。

久保 グレーって難しいですね、合法ですけど(笑)。学校や福祉施設では、避難経路と居室を防火上主要な間仕切りで区画する規定(令114条区画)がありますが、今回は垂れ壁だと廊下のハイサイドライトからの光が教室に届かないので、天井材と梁材の隙間を小屋裏の防火上主要な間仕切り扱いにしておいて、それ以下の部分は開口部扱いとして、不燃材のガラスならOKということで了解を得ました。

でもこれは他の行政だとう判断されるか分からない部分です。

上野山 十分グレーです(笑)。

1st action を終えて

現代社会における建築のあり方を考える時、我々が意識しないといけないテーマの一つに『木材』が挙げられます。今回、同世代で『木材』について気づき、考え、共有する機会として「建築と木材」を開催致しました。

パネリストの3名からは、“耐火木造への挑戦”“地域産材の活用”“木材の再利用”など、『木材』に対して異なるアプローチの刺

激的なお話を頂きました。参加頂いた方にも、単なる環境配慮に留まらない、『木材』の可能性を感じて頂けたのではないのでしょうか。

U-35委員会では、引き続き『木材』について継続的に考えを深めながら、新たなテーマにも取り組みたいと思います。【U-35 facebookページwww.facebook.com/U35.aaj】にて各種案内や活動等の情報を発信していきます

すので、そちらの方もご覧頂けたらと思います。2nd action 以降も、更なる同世代のプラットフォームを創出すべく、活動して参りますので、宜しくお願い致します。

最後になりましたが、ご参加頂きました皆様、パネリストの興津さん 久保さん 静さん、会館を利用させて頂きました大阪木材仲買共同組合の皆様、有難うございました。

▶書籍紹介▶

『重森三玲 モダン枯山水』

色あせることのない「永遠のモダン」を目指して200もの庭園を手がけた作庭家・重森三玲。大胆な石組、幾何学模様や直線・曲線、鮮やかな色の用い方など、斬新なデザインは近年再評価の兆しにあります。

本書は東福寺や松尾大社などの代表作から通常非公開の個人庭まで、現存の庭園30余を取り上げ、三玲が残した書物や日記からの引用や、作庭当初に撮影された写真をあえて多用しながら紹介していく、厳選された重森三玲作品集といえます。

イサム・ノグチや中川幸夫ほか多くの芸術家とも交友があり、前衛生け花や茶の湯など日本文化を幅広く探求して著書も多かったマルチ人間重森三玲の全貌に迫る一冊です。

監修 重森執氏

写真 大橋治三ほか

B5判、160頁

発行所 小学館

定価 本体3000円＋税



①特別展 ターナー展 英国最高の風景画家

風景画の可能性と、英国絵画の地位を飛躍的に高めたジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー（1775―1851）は、その生涯を通じて自身の絵画表現を追求し続ける求道者だった。本展は、世界最大のコレクションを誇るロンドンのテート美術館から、油彩画の名品30点以上に加え、水彩画、スケッチブックなど計113点を紹介。才能きらめく10代の習作から、若くして名声を確立しながらも、批判を恐れず新たな表現を追究し続けた壮年の代表作、70代の到達点に至るまで、栄光の軌跡をたどる。日本でまとめて見る機会が少ない巨匠の待望の大回顧展。

期 間 4月6日(日)まで

9:30～17:30

土曜日・日曜日は19:00まで

(入館は閉館30分前まで)

休館日 月曜日、1/14 (1/13は開館)

会 場 神戸市立博物館

神戸市中央区京町24番地

TEL.078-391-0035

観覧料 一般1,500円、高大生1,100円、

小中学生 600円



ターナー《ヴェネツィア、嘆きの橋》
テート美術館蔵 ©Tate 2013-2014

②開館40周年記念名品展

上村松園、富本憲吉、田中一光… 美の世界～近現代美術の100年～

開館40周年を記念して、上村松園や富本憲吉、田中一光など、奈良ゆかりの作家たちの作品をはじめ、白髪一雄らによる戦後の抽象美術の動向を示す作品など、当館が所蔵する近現代美術の中から日本画・洋画・版画・彫刻・工芸・デザインなど各分野の名品約120点を一堂に展示。日本の伝統美に始まり、多様化し変貌を遂げてゆく多彩な美の世界を、近現代美術100年の歩みとともに紹介する。

期 間 3月9日(日)まで

9:00～17:00 (入館は16:30まで)

休館日 月曜日

会 場 奈良県立美術館

奈良市登大路町10-6

TEL.0742-23-3968

観覧料 一般400円、高大生250円、

中小生150円



富本憲吉《磁器 赤地金銀彩羊歯模様 蓋付飾壺》
1953年

③第45回 日本美術展覧会 日展

日展は、明治40年の第1回文展（文部省美術展覧会）に始まり、帝展（帝国美術院美術展覧会）を経て、戦後、日本美術展覧会となった伝統ある総合美術展で、組織改正後、今回は第45回にあたる。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5つの部門からなる、世界でも類をみない総合美術展としてほぼ毎年開催され、全国の多くの美術ファンを集めている。

大阪展には、全国を巡回する基本作品273点に加えて、大阪・奈良・和歌山・兵庫の地元入選作品349点も陳列。美術の動きを展望できる格調ある作品を紹介する。

期 間 2月22日(土)～3月23日(日)

9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休館日 月曜日(祝日は翌平日)

会 場 大阪市立美術館

大阪市天王寺区茶臼山町1-82

(天王寺公園内)

TEL.06-6771-4874

観覧料 一般1,000円、高大生700円、

中学生以下・障がい者手帳等持参無

料(要証明)



日本画<想> 村居正之(評議員)

④アンドレアス・グルスキー展

ドイツの現代写真を代表する写真家、アンドレアス・グルスキー（1955年－）による日本初の個展。本展には、1980年代の初期作品に始まり、《99セント》（1999年）、日本で撮影した《カミオカンデ》（2007年）といった代表作から、最新作《カタル》（2012年）にいたるまで、グルスキー自身が厳選した約50点の作品が一堂に会する。衛星からの画像を基にした「オーシャン」シリーズ（2010年）や、川面を写す「バンコク」シリーズ（2011年）など、その作品は近年ますますコンセプチュアルな様相を強めている。同時に、まるで抽象絵画のような写真は、写真を使った画家とも言えるグルスキーが開拓した新たな境地を伝えている。初期から今日までを回顧する年代順ではなく、初期作品と新作、そして、大小さまざまな写真を並置する斬新な展示は、個々の写真を際立たせるとともに、展示室全体を一つの完璧な作品のようにも見せる。この比類のない展示により、グルスキーの写真世界の魅力を余すところなく紹介する。

期 間 2月1日(土)～5月11日(日)

10:00～17:00

金曜日は19:00まで

(入場は閉館30分前まで)

休館日 月曜日(4/28、5/5は開館)

会 場 国立国際美術館 地下3階展示室

大阪市北区中之島4-2-55

TEL.06-6447-4680

観覧料 一般1,500円、大学生1,200円

高校生800円、中学生以下無料



アンドレアス・グルスキー《99セント》
1999年 C-プリント 207×325×6.2 (cm)
©ANDREAS GURSKY / JASPAR, 2013/14
Courtesy SPRÜTH MAGERS BERLIN LONDON

⑤「ひめじ官兵衛プロジェクト連携」 特別企画展 城 つわものどもが夢の跡

城は戦国の世の攻防の舞台であるとともに、美しい建築物として多くの絵師、画家たちの心をとらえてきた。江戸時代には、戦国時代の出来事をそのまま描くことがはばかられたために、太平記の時代に仮託したり、武将の

名前を変えたりして合戦の様子が描かれた。時を経て往時の様子を留めない城も多くなったが、城址に歴史の浪漫を見出す画家や、壁と壁の織りなす複雑な建築に構成の美を見出し、日本的な油絵のモチーフとして好んでとりあげた画家もいる。本展では近世、近代において浮世絵、日本画、洋画などに描かれた城をテーマとした作品を集め、展覧する。

併設の特集展示として福田眉仙の作品も紹介。

期 間 2月11日(火・祝)～3月27日(木)

10:00～17:00

(入場は16:30まで)

休館日 月曜日

会 場 姫路市立美術館

姫路市本町68-25

TEL.079-222-2288

観覧料 一般800円、大高生500円、

中小生200円



吉田博「姫路城」1926年 姫路市立美術館蔵

⑥建築・建材展2014 (第20回)

「建築・建材展」は、最新の住宅・店舗・ビル用の各種建材をはじめ、設備機器やソフトウェア、工事・施工法、関連サービスなどが一堂に集まる国内有数の建築総合展。20回目の開催となる今回は、前回よりも出展者数・出展小間数ともに増加し展示規模を拡大。各種セミナーも実施し、安全・安心で快適な住環境・商環境づくりに関する最新情報を発信する。

期 間 3月4日(火)～3月7日(金)

10:00～17:00

(最終日のみ16:30)

会 場 東京国際展示場「東京ビッグサイト」

東5・6ホール

東京都江東区有明3-10-1

TEL.03-5777-8600(ハローダイヤル)

(3月末まで)

入場料 2,000円

同時開催の展示会 (JAPAN SHOP、リテールテックJAPAN、NFC & Smart WORLD、SECURITY SHOW、フランチイズ・ショー (3/4～3/6)、LED Next Stage) と共通、税込。Webサイトからの事前登録で無料。



「建築・建材展2013」の様子

▶ブルーノ・タウトの工芸 ーニッポンに遺したデザイナーー

ドイツ人建築家のブルーノ・タウト（1880－1938）は、1933年来日し、約3年半日本に滞在した。タウトはこの期間を「建築家の休日」と形容し、専門外の工芸品製作に取り組む。本展ではタウトが日本で取り組んだ工芸品に注目し、残された貴重な作品を通じて、体系的に考えられたデザインの創造と彼が目指した世界観を紹介する。

期 間 2月18日(火)まで

10:00～17:00

休館日 水曜日、2/16

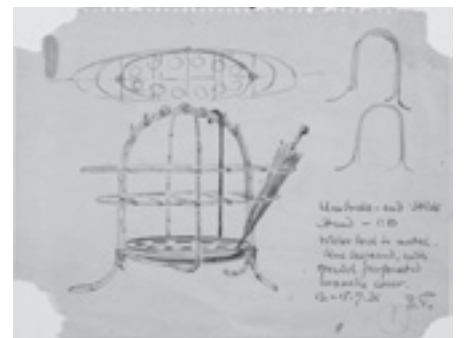
会 場 LIXILギャラリー (大阪会場)

大阪市北区大深町4-20

グランフロント大阪タワーA12階

TEL.06-6733-1790

観覧料 無料



ブルーノ・タウト デザイン画「傘・ステッキ立て」
個人蔵

本欄掲載の①～⑥の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（80円）を日本建築協会事務局までお送りください。

企画広告
新製品レビュー

付加価値商品による ハイクオリティーな 住空間のご提案

アーキテリアシャッター スカイフォールド

スガツネ工業株式会社

スガツネ工業株式会社とは

家具建築金物・産業機器用 機構部品のメーカーです。

“顧客の信頼とニーズに応え、品質のリーディングカンパニーをめざす”を品質方針とし、生活の中で役立ち、暮らしに便利さと潤いをもたらすハードウェアを提供します。

■アーキテリアシャッターとは

素材とディテールのこだわりを大切にしたスガツネオリジナルの、エクステリアに最適な電動シャッターシステムです。

建築物の顔としてオリジナリティーに溢れ、高付加価値を生み出せる新たな商材としてご紹介させていただきます。

用途

アーキテリアシャッターは、ロートアイアンやガラスで構成される門扉用シャッターです。デザイン性も高く、建築の顔となる部分に用いていただくことで、建物自体に高級感をもたらします。

特に、鉄製の力強さを残しつつ繊細な美しさを兼ね備えたロートアイアンは、装飾としての価値に留まらず、高い防犯性を評価され中世からドアの補強や門扉、貴重品箱などのセーフガードとしての役割を果たしてきました。

ロートアイアンを用いたシャッターというと、教会や迎賓館など、特殊な建物のフェンスという印象があるかもしれませんが、ロートアイアンのセキュリティの高さから特殊な建物だけでなく、住宅や店舗にも幅広く用いられるようになってきています。

スマートな壁面展開

今までのシャッターは支柱間に設置するため、どうしてもシャッター面と支柱に段差ができてしまいました。

アーキテリアシャッターは内側にオフセットしたガイドレールにより、シャッター面と隣接壁がフラットになるため、美しいデザインが実現可能です。

操作・安全性

押しボタンの他、リモコンで遠隔操作が可能です。また、障害感知機能付きの為、下降中に感知スイッチが障害物に接触すると、下降を停止し、反転上昇するようになっています。



* 現場使用例 ロートアイアン仕様

仕上げ

ロートアイアン、フレームレスガラス、ロートアイアン+ガラスのコンビネーションなど、外壁との調和に適した素材が選択できます。



ガラス仕様



ロートアイアン+ガラス仕様

●新機種（横引きタイプ）

従来の縦型に加え、横引きタイプがバリエーションとして追加になりました。

横引きタイプは、総間口5500mmまで対応でき、車2台分の間口まで対応できるようになりました。

上部にシャッター巻き取りスペースが不要なため、天井の強度不足の場合に有効です。



横引きタイプ

■スカイフォールドとは

大きなフロアスペースを有効に活用していただける電動式遮音間仕切りシステムのことです。

従来の可動式間仕切りパネルは天井にレールを仕込み、人的作業でスライドさせる方法が一般的ですが、大型になればなるほど作業効率が悪くなり、また枚数が増えれば増えるほど、現場においての作業は大変になるばかりでした。しかし、スカイフォールドは電動でパネルを稼働させる事ができ、作業効率を上げることができます。また、天井に間仕切り部材を収納させることで、従来よりもスペースを確保しやすく、収納操作は2人で行うことで誤作動を防じできる安全性も備えている優れた商品です。

仕様

最大開口部高さ9145mm（開口部幅は3050mm以上で最大幅はありません）。従来の横にスライドする稼働壁と比べ、本製品はパネル部が分散荷重となるため構造物に負担をかけず、梁も大きくなりません。

空間を有効活用

間仕切りはコンパクトに天井に収納され、室内を有効に活用できます。また、床や壁などにガイドを必要とせず、意匠を損なわない提案が可能です。

優れた操作性と安全性

鍵を回してスイッチを押すだけで毎分1.5～3mの速さで簡単にパネルが開閉でき、操作音も静かです。

閉じている最中にパネルの下端が障害物を検知すると動作を止めます。また、モーターの所定出力より大きい負荷を感知すると電源がカットされます。

高い遮音性

銅板とハニカムコアで構成され、約40mmの遮音材をパネル内側に使用。二重の床シールや壁面に押し付けられたシールにより遮音性能を発揮します。建築基準法施行令第22条の3（遮音性能に関する技術的基準）を各周波数でクリアしています。

仕上げ

パネル表面は布・ステンレス鋼・メラミン等の仕上げが可能で、使用場所のデザインに調和します。

■実例

●会議室・オフィス

目的に応じて個室化、ワンフロアー化への提案



●宴会場

演目状況に応じた空間提案



●大ホール・多目的ホール

催事に応じての空間提案



スガツネ工業株式会社

本社

〒101-8633 東京都千代田区東神田1-8-11

TEL : 03-3866-2268

FAX : 03-3863-6877

大阪支店

〒540-0038 大阪市中央区内淡路町2-2-6

TEL : 06-6910-1122

FAX : 06-6947-1199

<http://www.sugatsune.co.jp/>

編集委員会

第9回編集・広告企画合同委員会

12月11日（水）17：30～18：45

日本建築協会会議室

出席者 米井委員長ほか3名

議 事 (1) 1月号特集「エアーマネジメントの新展開に向けて」
2月号特集「Fusionする空間(仮)」3月号特集「東海特集」、「ABENO REBORN」
4月号特集「私の空間作法」6月号特集「オフィスのこれから(仮)」
(2) 広告依頼先検討

第1回広告企画小委員会特別委員会

12月11日（水）16：00～17：00

東リ(株)会議室

出席者 米井広告企画委員長ほか13名

議 事 (1) 2014年6月号特集「オフィスのこれから(仮)」

第4回建築計画系分科会

12月18日（水）19：00～21：30

ニューミュンヘン北大使館

出席者 渡部幹事ほか4名

議 事 (1) 9月号特集をふりかえる
(2) 今後のスケジュールと役割分担
(3) 8月号特集の企画

第6回インテリア・住宅系分科会

12月17日（火）19：00～20：00

なにわ食彩しずく

出席者 間瀬幹事ほか5名

議 事 (1) 2月号特集の企画

第9回構造分科会

12月6日（金）18：00～18：30

日本建築協会会議室

出席者 角田幹事ほか5名

議 事 (1) 12月号特集をふりかえる
(2) 今後の予定

第8回設備分科会

12月4日（水）18：00～20：30

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか6名

議 事 (1) 設備の頁の企画
(2) 特集テーマの検討

第8回法令分科会

12月18日（水）15：00～17：00

日本建築協会会議室

出席者 吉岡幹事ほか3名

議 事 (1) 法令コーナーの企画

第8回作品作風小委員会

12月19日（木）19：00～20：00

日本建築協会会議室

出席者 稲垣幹事ほか4名

議 事 (1) 作品の選定、掲載状況の報告
(2) galleryの掲載報告と予定

事業委員会

第8回U-35委員会

12月13日（金）19：00～21：30

東畑建築事務所会議室

出席者 駒井幹事ほか9名

議 事 (1) 見学会の結果報告
(2) 「建築と社会」活動報告記事掲載内容の検討

出版委員会

第7回出版委員会

12月19日（木）18：00～18：30

住まいの研究室

出席者 西委員長ほか7名

議 事 (1) 〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
(2) 進行中のテーマの検討
(3) 出版記念講演会の検討

教育委員会

第2回工高生教育小委員会

12月12日（木）18：00～19：30

日本建築協会会議室

出席者 谷口幸雄副委員長ほか4名

議 事 (1) 第59回工高生デザインコンクール実施報告
(2) 第60回工高生デザインコンクール募集規定の検討

100周年関連事業委員会

第3回史料研究会（再読 関西近代建築）

12月10日（火）18：00～19：45

日本建築協会会議室

出席者 山形委員長ほか4名

議 事 (1) 今後の連載企画の検討
(2) 「再読」「100年史」等の刊行について
(3) 協会所蔵書籍のリストについて

第9回10年委員会

12月5日（木）18：30～19：30

日本建築協会会議室

出席者 設楽委員長ほか7名

議 事 (1) 大阪ええとこ創生プロジェクト・コンペ案検討

2013年建築関係団体合同忘年懇親会

12月13日（金）18：00～19：30

会 場 シティプラザ大阪2階「旬」

参加者 231名

編集委員会（平成25年度）

■副会長

設楽 貞樹

本多 友常

■編集担当理事

西 博康

押味 至一

佐藤 榮一

竹中 統一

立成 良三

松本 眞一

吉村 英祐

◎米井 寛

■副委員長

勝山 太郎

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

高橋 和也

田中 直人

不動 剛志

紅谷 昇平

松田奈緒子

三宅 次郎

△守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

荒木 宏之

大西 広朗

神戸 嘉也

静 茂夫

下坂 浩和

野田 隆史

橋本 祐典

三谷 帯介

矢野 展寛

米山 剛史

△渡部 剛

★インテリア・住宅

川合 隆之

黒柳 亮

酒井 雅男

谷垣 浩一

塚口眞佐子

ペリー史子

△間瀬 一博

森岡 拓也

■構造分科会

秋田 智

石田 大三

岸本 光平

小芝 淳一

志摩 好宣

瀧野 敦夫

△角田 耕一

橋本 宗明

松村 健

向井 洋一

◎委員長 ○副委員長

▲小委員会委員長 △幹事

■設備分科会

赤澤 正治

岩城 憲治

梶井 宏修

北野 勝也

樺田 輝生

夏井 重行

野崎 正二

△橋本 直樹

福谷 周

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

村上幸三郎

■施工材料分科会

荻渠 友貴

桜井 和男

高橋 秀一

△中野 敬史

藤丸 啓一

渡邊 聡

■法令分科会

岩見 吉剛

河野 学

小松 輝樹

△吉岡 忠

平山 英

井上 久明

田中 幸夫

■作品作風小委員会

居内 章夫

池上 明

▲稲垣 和江

井上 雅祐

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉橋 尉仁

倉淵奈千子

澤田 純一

鞆野 淳司

豊田 充広

鳥居 久人

西田 佳代

芳谷 晴彦

増田 敬彦

■広告企画小委員会

大谷 金由

小川 雄介

小山 昭

権代 晃

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

印刷 2014年1月29日

発行 2014年2月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1200円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。

電気工事・空調工事・水道衛生工事・消防施設工事
および機械器具設置工事の設計、監理、施工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話 (06) 6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話 (03) 3261-8231
支店 札幌・仙台・新潟・さいたま・横浜・豊田・金沢・京都・神戸・天理・岡山・
広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・福島・山形・前橋・宇都宮・土浦・千葉・
長野・松本・静岡・刈谷・津・岐阜・富山・福井・和歌山・東近江・山口・
松江・松山・高知・徳島・宮若・鳥栖・長崎・大分・宮崎・鹿児島・那覇
海外支店 シンガポール・ホンコン・マニラ (フィリピン) ・ベタリンジャヤ (マレーシア)
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話 (0492) 58-1511

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧にに対応できるように

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 **中島弘文堂印刷所**

本社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765
東京事務所 〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町1丁目9番地ニュー御茶ノ水ビル601号
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理
株式会社 **日本電気化学工業所**

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市嵐池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

コンクリートのひび割れ対策に

NETIS 登録済み
KT-040018-V

DENKA
DENKI KAGAKU KOGYO KABUSHIKI KAISHA

高性能膨張材

デンカパワーCSA

JIS A 6202
適合品

特 性

- ・乾燥収縮の低減
- ・自己収縮の低減
- ・水密性の向上(防水性)
- ・温度ひび割れの低減

主な用途例

- ・合成デッキスラブ
- ・土間スラブ
- ・RC 構造物
- ・自己充填コンクリート
- ・マスコンクリート 他

膨張材以外にも

- ・無収縮グラウト材
(タスコン)
 - ・躯体防水材
(シャガード)
 - ・ポリマーセメントモルタル
(RIS シリーズ)
- など、各種混和材(剤)を
ラインナップしています。

●資料のご請求お問い合わせは・・・

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社 本社
〒629-3101 京都府京丹後市網野町網野 126
TEL 0772-72-2220 FAX 0772-72-2888
舞鶴営業所・福知山営業所・豊岡営業所

金森藤平商事株式会社 大阪営業所
〒561-0817 大阪府豊中市浜 1 丁目 1 番 7 号
TEL 06-6332-6861 FAX 06-6332-6884

小浦産業株式会社
〒550-0004 大阪府大阪市西区靱本町 1 丁目 14 番 6 号
TEL 06-6443-6181 FAX 06-6443-6270

平成25年度 1級建築士 設計製図試験

全国

No.1
合格者占有率

重要なのは「今」の試験の合格実績
今年も合格者数No.1

全国の合格者のおよそ6割は、
当学院の現役受講生でした。

全国 合格者占有率

55.8%

他講習
利用者
+
独学者
当学院
現役
受講生

全国合格者4,014名中、当学院現役受講生2,238名

1級建築士を1年で取得するなら総合資格学院

全国ストレート合格者の(平成25年度 学科+製図合格)
およそ3人に2人が当学院現役受講生!

全国ストレート合格者1,714名中、当学院現役受講生1,086名

全国 学科・製図
ストレート合格者
占有率

63.4%

他講習
利用者
+
独学者
当学院
現役
受講生

※当学院のNo.1に関する表示は、公正取引委員会「No.1表示に関する実態調査報告書」に基づき掲載しております。※全国合格者数および全国ストレート合格者数は、(公財)建築技術教育普及センターの発表に基づきます。
※当学院合格者数および占有率はすべて平成25年12月19日現在のものです。

平成25年度 2級建築士 設計製図試験

当学院教室開講都道府県 (平成25年度 学科+製図合格)
学科・製図ストレート合格者 占有率

2級建築士を1年で取得するなら総合資格学院

当学院教室開講都道府県
ストレート合格者の
およそ2人に1人は
当学院の現役受講生!!

45.4%

当学院教室開講都道府県ストレート合格者2,999名中/1,363名
※学科・製図ストレート合格者とは、平成25年度2級建築士学科試験に合格し、平成25年度
2級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。 < 平成25年12月5日現在 >

平成25年度 宅建本試験

当学院基準達成
現役受講生 合格率

82.9%

8割出席・8割宿題提出・
公開統一模試得点率8割以上
現役受講生 252名中/合格者 209名
< 平成25年12月4日現在 >

平成25年度 1級建築施工管理技術検定 学科試験

当学院基準達成
現役受講生 合格率

8割出席・8割宿題提出
現役受講生 230名中、合格者 219名
< 平成25年7月19日現在 >

95.2%

平成24年度 1級建築施工管理技術検定 実地試験

当学院現役受講生
合格者数

< 平成25年2月7日現在 >

956名

※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。

無料 法人サポートサービス

企業の将来を担う、若手技術者の育成にご協力いたします。

好評受付中!!

詳しくは最寄校まで

Web学習サービス

社員の皆様が、自宅で資格取得に向けて学習
に取り組むためのWeb学習サービスを提供
します。多忙な業務のなか、自主的にスト
レスなく取り組むことができるサービスです。

●1級・2級建築士(学科) ●宅地建物取引主任者

各種合格ガイダンス

1級・2級建築士、宅建、1級建築施工管理
技士など、各種資格試験の概要や、最新傾
向、学習方法などをご説明します。

●1級・2級建築士(学科・製図)
●宅地建物取引主任者
●1級・2級建築施工管理技士(学科・実地)

模擬試験・社内講習会

当学院オリジナルの模擬試験により、社員
の学習レベルを診断。さらに社内講習会に
より、試験対策指導を行います。

●1級・2級建築士(学科・製図)
●宅地建物取引主任者
●1級・2級建築施工管理技士(学科・実地)

有資格者育成プラン作成

それぞれの企業のニーズに合わせた、社員
教育のプランをご提案させていただきます。

●1日プラン ●年間プラン
●新入社員研修プラン ●内定者学習サポート

法定講習: [株式会社総合資格 実施] 監理技術者講習/宅建登録講習/宅建登録実務講習 [株式会社総合資格学院法定講習センター実施] 一級・二級建築士定期講習/管理建築士講習/第一種電気工事士定期講習



総合資格学院

お申し込みは、当学院ホームページまたはお電話で。

www.shikaku.co.jp 総合資格 検索

梅田校 TEL.06-4709-8111 京橋校 TEL.06-6882-8211 堺校 TEL.072-222-9311 姫路校 TEL.079-224-1411 草津校 TEL.077-566-6911
新大阪校 TEL.06-6101-1911 なんば校 TEL.06-6648-5511 神戸校 TEL.078-241-1711 京都校 TEL.075-352-3011 奈良校 TEL.0742-30-1511